

60317

教科書文庫

6
810
34-1950
01304
49757

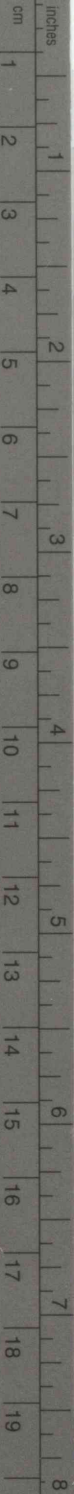
526  
797

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済教科書

2	小国 515
東書	



71A7
1K9
2

柳田国男編  
新しい国語

五年上



教科書文庫

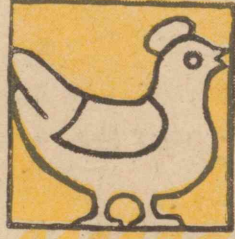
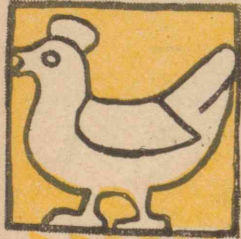
6

810

34-1950

0130449757

昭和二十五年八月十二日 文部省検定済  
小学校国語科用



新しい国語

五年上

広島大学図書

0130449757



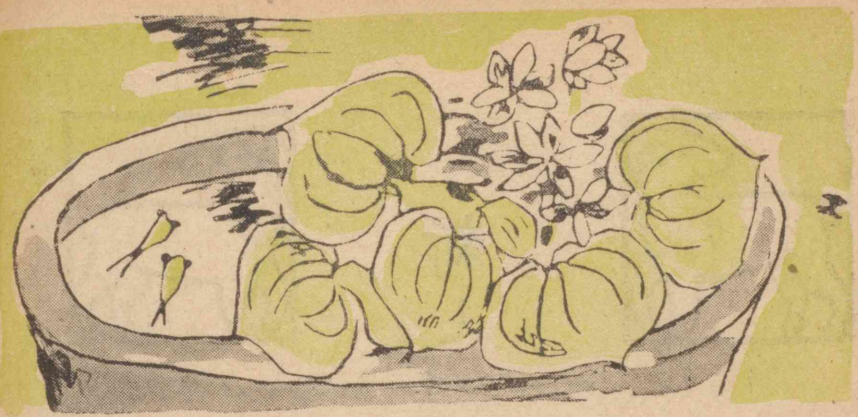
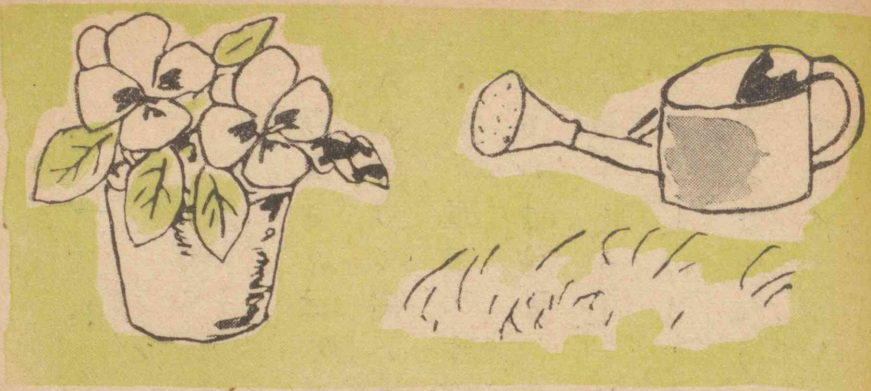
中央図書館

広島大学図書

0130449757



東京書籍株式会社



もくろく

一 小鳥 ..... 四

(一) 小鳥の歌声

(二) 小鳥のちえ

(三) つばめ

二 心の美しさ ..... 二十二

(一) 馬車と走る子

(二) まる木小屋のリンカーン

三 よいからだに育てよう ..... 三十六

(一) 日曜日の朝

(二) 水泳大会

四 ことばのいろいろ ..... 六十五

(一) 物の名前

(二) こまかく言い表わす

五 私たちをつなぐもの ..... 八十

(一) ゆう便の始まり

(二) 子供通信

六 入の力 ..... 九十八

(一) 自然を利用する

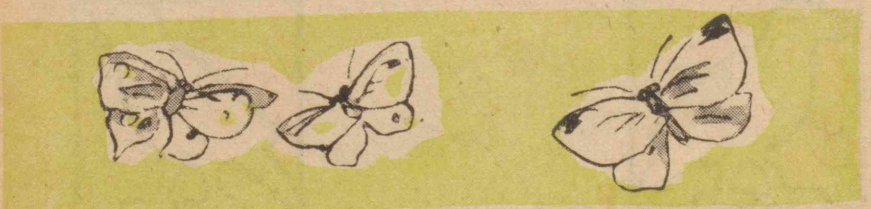
(二) 電燈の話

(三) かびの働き

七 助け合い ..... 百十八

ふろく 新しく出た漢字 ..... 百四十四

勉強の手引 ..... 百四十五



一 小鳥

(一) 小鳥の歌声

みなさんは小鳥の鳴き声を、  
気を付けて聞いたことがありま  
すか。屋根のすずめはなんと鳴  
いていますか。チュンチュンで  
すね。しかし、それだけでしよ  
うか。しゅうじをあけてよく聞  
いてみましょう。

チュイーン チュツチ

チームチュン

チュイーン チュツチ

チームチュン

耳をすまして聞いてみると、こんなよい声で鳴いています。  
これは楽しくてうかれていている声です。

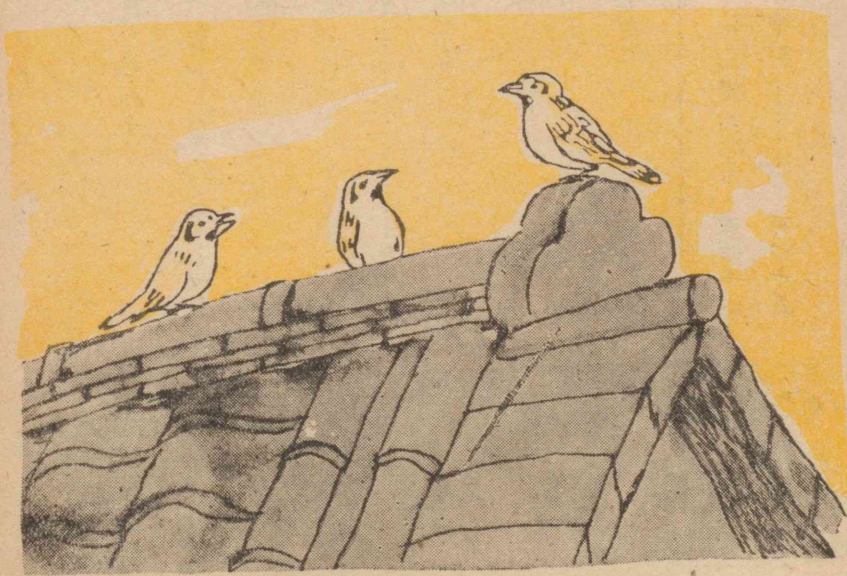
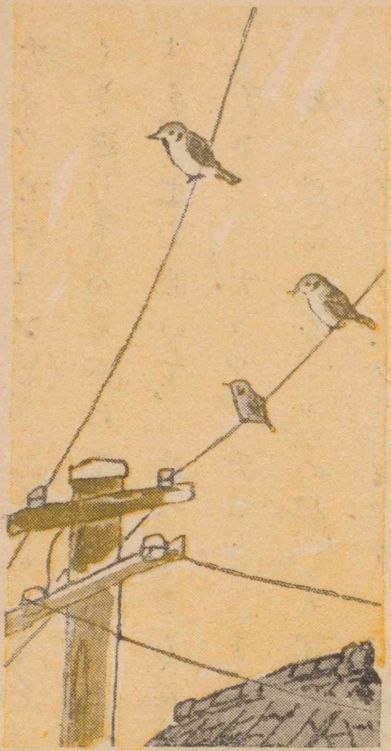
向かいの電線に止まっているすずめは、なんと鳴いているで

しょう。

チエツ チュン、チエツ

チュン、チエツ チュン

これも楽しそうな声です。  
けれどもこのすずめは、前  
のすずめよりはべたです。



チュツとチュンと、二つしかことばを持っていないで、それをくり返しているだけです。みなさんの近所のすずめはどうでしょう。よく聞いて、比べてごらん下さい。

チュツ チュツ チュツ チュツ チュツ

あ、どこかですずめが、もずに追われています。

ジユク ジユク ジユク ジユク

ほら、助けてくれと、よんでいます。

キイ キイキイ キリキリキリキリ

もずが鳴いています。すずめをいじめそこなったもずでしよう。けやきの木のとっぺんで、おをくるくる回しながら、くやしそうに鳴いています。

うぐいすの鳴き声は、みなさんよく知っていますね。

ホーホケキヨ

という声を聞くと、もう春が来たような心持がします。じょうずなうぐいすは、

ヒヒーホケツキヨ

ホーホケツキヨ

ホホホホホーケツキヨ

と、三つの節の歌を歌います。初めのは高い調子で、終りのは低い調子です。また、何かにおどろいた時には、

ケケツキヨ ケケツキヨ ケケツキヨ



と、せわしそくに鳴きます。そしてこれは、たいてい飛びながら鳴くので、うぐいすの「谷わたり」といわれます。

人間のことに、土地土地によってなまりがあるように、鳥の鳴き声にも、土地によってちがひがあります。

私が聞いたのでは、京都の大文字山だいもんじという山のうぐいすは、たいてい、ホーホケケキヨ、と鳴いていますが、同じ京都でも、比叡山ひいざんでは、ホーホキイコホイ、と鳴くのがたくさんありました。また、飛驒ひでの山おくて聞いたのは、ヒーホケチヨホケチヨ、長野県の山で聞いたのは、ホーホケキヨン、というのでした。千葉県のいなかで聞いたのは、もつとへたなうぐいすたちで、ホーホキヨ、ホーホキヨ、と鳴いていました。こゝういうように、いろいろの地方で、変わった鳴き方をする

のは、どういうわけでしょう。それは、子供の鳥が、親鳥たちの鳴き声を聞き習って鳴くからです。

次はひばりの鳴き声をよく聞いてみましょう。

ビリユービリユー　ビリユービリユー

何か話し合いながら低く飛んでいます。おどろかさないうように静かにして、さえずるのを待ちましょう。

チーチブ　チーチブ　チーチブ

ほら、さえずり始めました。これは空へ上がる時の歌です。

まっすぐに上がっていきますね。

チュクービービー　チュクビービー　チュクビービー

輪をかいて回りながら鳴き始めました。

チーチーチュク　チーチーチュク　チーチーチュク

チュビチュビチュビ

チールールー チールールー チールール

さかんに鳴いています。なんとといううらかな気分でしょう。

フイーチチ フイーチチ チカチカチカ

ほら、せきれいの鳴きまねを始めました。

チツピーチチ チツピーチチ チツピーチチ

こんどはほおじろの鳴きまねです。

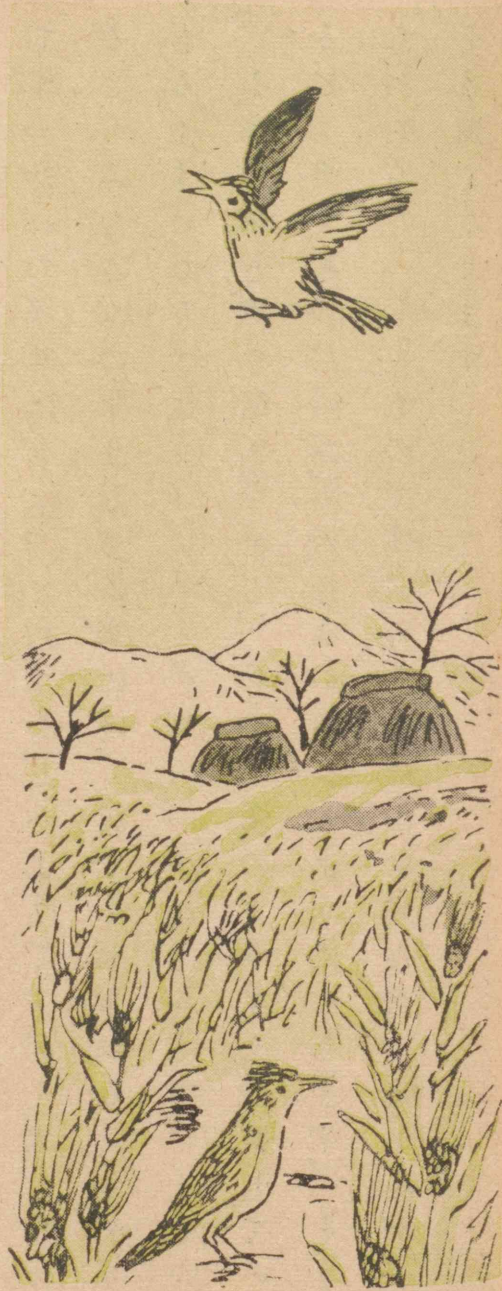
飛んでいるのが見えますか。あんなに空高く上がって、むち

ゆうになって歌っています。

リユリユリユリユリユリユリユ

さあ、もうおります。ほら、そこへおりて来ました。

初めのチーチブ チーチブ、というのは 上がる時に鳴く声



で、リユリユリユリユは、おりる時です。そしてその間の声は、空をまいながら鳴く楽しみの歌で、いろいろの歌を、かわるがわる歌い続けます。

声のよいひばりは、十いくつもの文句を持っていて、これを

くり返しくり返し、休む間もなく歌います。しまいには自分の鳴き声だけでは足りなくなり、ほかの鳥の声まで取り入れて、歌をにぎやかにするので。このことを、ひばりの「拾いこみ」といっています。

小鳥の鳴き声は、よく聞いてみるとたいへんおもしろいものです。初めのうちはちよつとむずかしいようですが、少しなれると、みなさんのようなよい耳には、訳なく聞き取ることができるといわれます。

小鳥の鳴き声を聞きながら、その小鳥のようすを観察していると、鳴き声のだいたいの意味がわかるようになります。そうならたいしたものです。野や山に出かけた時、楽しみが一つ、そう深くなります。

## (二) 小鳥のちえ

みなさんは、小鳥たちに、ものを覚えたり何かを考えたりするような力があるとは思えないでしょう。しかし、実際に小鳥たちの生活を見ていますと、小鳥たちは思いのほか発達していて、犬やねこなどよりももつとりこうなのではないかと、感じられることがあります。

小鳥たちの記おくのよさはたいしたものだと思います。もちろん、どの鳥もそうだとはいえないでしょう。かけすのようにくりの実やどんぐりを土の中にうずめてしまって、そのままわすれてしまうものもあります。しかし、多くの小鳥がたいへん遠い国へわたっていき、また来年帰って来る時に、去年住んだ土



地、去年すを作った場所に、ちやんともどつて来ることなど、その一つの大きな例だといえましよう。小鳥たちが「わたり」をするのは、また、別の力によるのだと考えてよいでしょうが、もとの場所を見つけるのは、そのもの覚えのよさだと考えてよいでしょう。

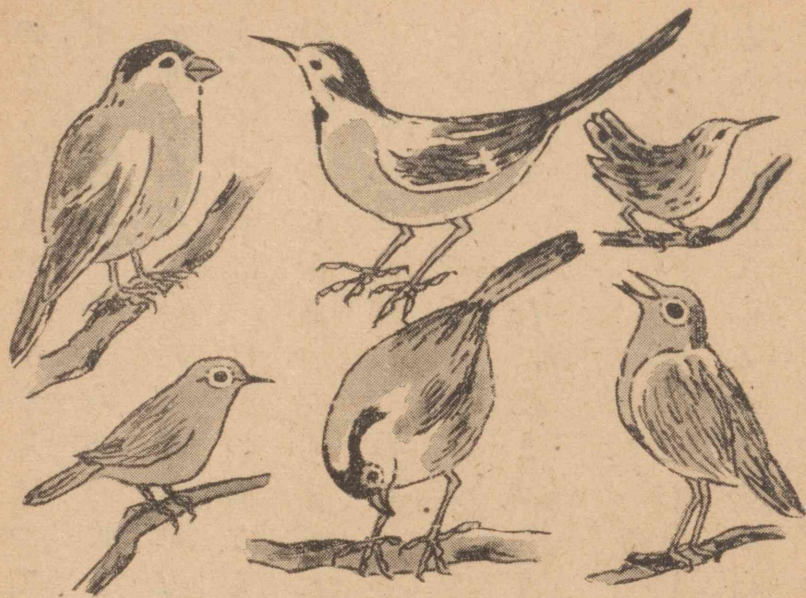
伝書ばとが遠くから帰って来るのも同じことがいえましよう。小鳥をかつているとよくわか



りますが、小鳥たちは人をよく覚えます。そして好きな人には愛情を示しますが、きらいな人が来ると、いやがつてあばれるような鳥もあります。家もへやもよく覚えているようです。野外の鳥も、そのありさまはなかなか見きわめにくいものですが、もちろん、同じことであるにちがいありません。ひばりのような鳥が、ほかの鳥の歌を覚えてそのまねをすることなども、一つのもの覚えのよさを物語るものといえましよう。

もの覚えの点は別として、小鳥たちのいろいろなおこないを見てみますと、そのりこうなことにびっくりすることがあります。そしてそれは、かんたんに小鳥たちの生まれつきのものなどといつて、かたづけしてしまうことのできないものだと思われま

アメリカのぎっしにこんな話がのっていました。どこもこもすっかりこおりついでいる寒い冬の日、ある池に一群れのつぐみがやってきました。つぐみたちはそこで水を飲みたいと思いましたが、水はみんなこおっているために、のどをうるおすことができません。そのうちに一羽のつぐみが、池の氷の上におなかを付けてすわりました。しばらくするとそのつぐみがどいて、その場所にほかのつぐみがかわりました。こうしてつぐみと何ばかのつぐみがかわるがわる同じことをしているうちに、池の氷はあたためられてとけ始め、そこに水がたまりました。そしてつぐみたちは、池の水を飲むことができたそうです。このように、小鳥たちのすることには、実際感心するようないことがなかなか多いのです。



ところで、小鳥たちの中で一番かしこいのは、なんでしようか。それはおそらくからすやすずめでしょう。これらの鳥は、いつもわれわれ人間の近くで生活しているために、りこうになったのかもしれない。みなさんの中に、すずめなんかと言つて、ばかにしている人はいませんか。しかし畑をごろんなさい。おかしなかがしが立っています。すずめたちはあ

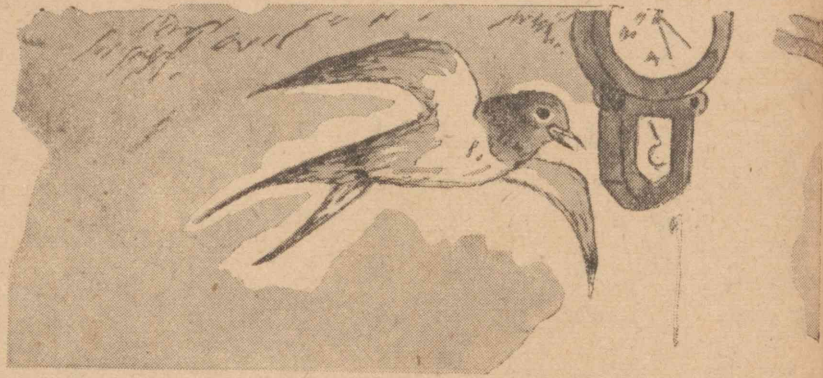
のようなものはすぐ見破つて、なんとも思わなくなりませす。す  
ずめたちは、かすみあみにさえもなかなかかかりません。また、  
とりもちの付いたぼうきれなどには、決して止まらないでしよ  
う。すずめは、ほかの鳥ならにげ出せないかごからでも、少し  
のぬけあながあつたらすぐになげ出してしまひませす。

すずめは人間になれにくい鳥だと思われては、すずめたちは人によ  
をかわいがっているヨーロッパの国では、すずめたちは人によ  
くなれて、かたに止まったり、人の手からえさを食べたりする  
そうです。

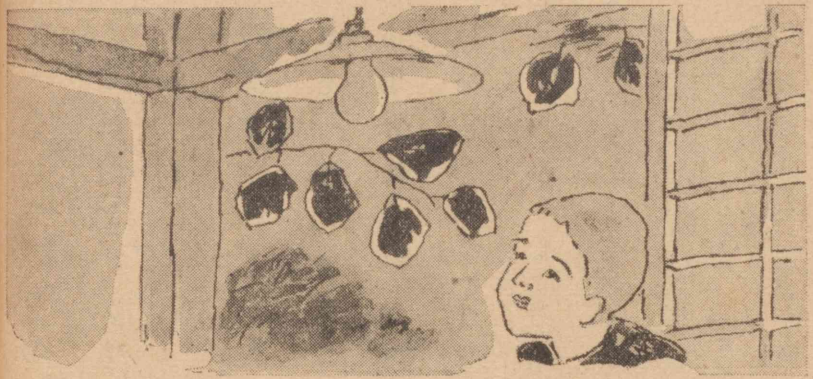
小鳥たちの習性にはおもしろいものがあります。たとえば、  
ひなを連れてくるかもの親は、人や犬などが近づくと、急に飛  
べないふりをして、少しずつにげながら人や犬の注意をそらし

ませす。そして、その間にひなを安全な場所ににがしてしまひま  
す。これはどののかもやることですから、生まれつきのもので  
しよ。うぐいす、めじろがとりもちの付いたえだに止まると、  
そのままはねをたたんで、くると下へ落ちてにげさります。  
これも、はねをもちに付けないうちに気を付けるといふよりも、  
やはり習性の一つだと思ひませす。

しかしこのよな習性のほかに、私たちは小鳥のほんどうの  
意味でのかしこさも、たくさん見ることができませす。そし  
て、こいうことを知ることには、私たちが小鳥たちに対する愛  
情を深めるばかりでなく、自然のすばらしさに強くひかれるこ  
とになります。



どこへ飛んで行ったろう。  
つばめはきつとびっくりしたたろう。  
だが、ぼくもおどろいた。  
なんだかむねがときどきした。  
そのあとではればれた。  
きょう、なにか  
よいことがあるような気がした。  
なぜだか、どんなことだか知らない。  
ただ、なんとなくそう思えた。



(三) つばめ

しようじをあけると、  
明かるい朝の風といっしょに、  
つばめが一わ飛びこんで来た。  
つばめはくるくるへやじゆうを回り、  
ときどきこまったようにはばたき、  
また、いくども天じようを回って、  
ひらりと外へ出て行った。

## 二 心の美しさ

### (一) 馬車と走る子

ある日のことでした。フランスのあるいなか町から、お客を乗せた乗合馬車が、いまバリへ向かって出発しようとしていました。するとその時、向こうの方からふたりの男の子が走って来ました。ひとりには十四五さい、もうひとりには十さいぐらいで、なかのよい兄弟のようでした。ふたりとも見すばらしいみなりをしています。

「おじさん、この馬車はバリへ行くのですね。」  
と、年上の子が言いました。

「そうだよ。乗るのなら早くお乗り。もう出るよ。」

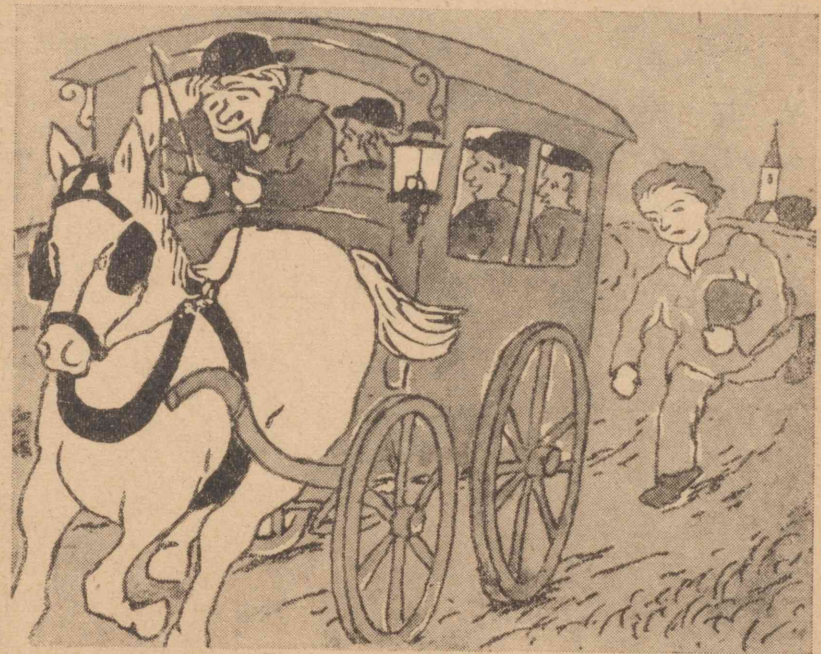
「それでは、弟を乗せてやってください。」

「ああ、いいよ。」

ぎよ者は小さい子をだきあげて馬車に乗せました。そして走り出しました。

すると、どうでしょう。兄はその馬車のあとを追いかけて、いっしょにどんどん走り出したではありませんか。馬車のお客たちは、





初めのうちは、その子が弟を見送るために、走っているのだと思っていきました。けれどもその子は、どうしたのか、いつまでもいつまでも、走ってついて来るのです。二キロも三キロも。——もう、その子の顔からはあせがたきのように流れて、息がいまにも切れるようでした。

「どうしたの。なぜ、おまえのにいさんは、あんなに走

って来るのかね。」

と、ひとりのお客が小さい弟に聞きました。すると、弟は言いました。

「パリへ行くんです、ぼくといっしょにいさんも。」

「えっ、パリへだって。」

「パリまで走るつもりかい。」

お客たちはおどろいて聞きました。そこからパリまではまだ十キロもあるのです。

「にいさんはどうして馬車に乗らないのかね。」

と、また、もうひとりのお客が言いました。

「だって、お金がないんです。ひとり分のお金しかないから、ぼくだけ乗せて、にいさんは走って行くって言うんです。自

分は大きいから、きつと走って行けるって——」。

お客たちは顔を見合わせて、なんとらんぼうな、けれどもまた、なんとやさしい、弟思いの兄だろうと、おどろきの声をあげました。そして、

「パリへ何をしに行くの。」

とたずねると、その小さい子はなみだぐみながら言いました。

「ぼくたちはいなかで、おとうさんといっしょにいたんです。

でもおとうさんは、この間死んでしまいました。だから、パリへ行くんです。おかあさんがパリで働いています。ぼくたちはおかあさんのところへ行くんです。」

「かわいそうに……。」

お客たちはみんな、そう思いました。そして、だれが言い出

すともなく、みんなで少しずつお金を出し合って、走っている兄を、馬車に乗せてやろうということになりました。

ひとりのお客が急いで馬車を止めさせました。そして、みんなの出し合ったお金を集めて、ぎよ者にこの話をしました。

「いや、そんなことは少しも知らなかった。」

と、ぎよ者はあわてて言いました。

「なあに、そんなことならお金などはいりませんよ。それよりも、そのみなさんのお金は、ふたりの子供たちにやってくださいよ。」

「ありがとうございます。それではそうしましょう。」

と、お客たちもうれしそうに言いました。

(二) まる木小屋のリンカーン

森の木かげにつないだほろ馬車の中を、野うさぎのようにのぞいた少年がありました。近くのまる木小屋に住んでいるリンカーンです。

「おや、本を読んでいるんだね。」

ほろ馬車のはしごにこしかけて、本を読みふけていたかわいい少女が、おどろいて顔を上げました。

「それ、なんの本なの。」

見ると、そまつな服を着ていますが、りこうそうな顔をしています。少女は安心して口をきく気になりました。

「これ、歴史の本よ。あなたは、本がすきらしいわね。見せて

あげましょうか。」

「ありがとう。きれいな本だね。」

そう言つて、リンカーンが少女のそばへ寄つたかと思つと、もういつしよに本を読んでいます。

「これ、だれの絵だか知つているでしょう。」

少女は、さし絵にあるりっぱな人物の顔を指さしました。





「さあ……」。

「ワシントン大統領よ。」

「えっ、この人がワシントン。」

リンカーンは、アメリカを独立させたワシントンの、しょう像画をじつとながめていました。

あくる朝、ほろ馬車は少女と美しい本を乗せて、どこか遠くへ行ってしまいました。リンカーンの心には、ワシントンのことが強く残りました。

リンカーンは、もつとくわしいワシントンの伝記を読みたいと思いましたが、このさびしいかたいなかには、本屋もなければ、図書館もありません。

方々をさがし回って、やっととなり村のクロホードおじさんの家で、ワシントンの伝記を一さつ見つけました。おじさんは、その大切な本を心よく貸してくれました。

「おじさん、ありがとうございます。一月ぐらいしたら、返しにきます。」

「いいとも、いいとも、何も急ぐことはないんだから……。」

喜んだリンカーンは、畑のじゃがいもをほったり、まきをわったりするいそがしい仕事のひまを見つけて、ワシントンの伝記をむさぼるように読みました。夜もおそくまで読み続けました。

ところが、ある夜、ひどいあらしがやって来ました。そまつなまる木小屋は、風にふかれて左右にゆれ動いています。ぼたりぼたりしずくがたれるのは、雨もりにちがいありません。心配になったリンカーンは、起き上がってろうそくの火をつ



けてみました。おどろいたことに、つくえの上に置いてあった本が、しずくのためにすっかりよごれているではありませんか。あわてて取り上げましたが、もうあとのまつりです。クロホードおじさんから借りてきたワシントンの伝記が、びしょぬれになっていきます。

「どうしよう、人に借りた大切な本をよごしてしまつて。」

リンカーンはぬれた本をだいたまま、なき出しそうになりました。まる木小屋にふきつける雨は、ますますひどくなってきました。

とほうにくれたリンカーンの心に、少年時代のワシントンの話がうかびました。

大切なさくらの木を切つて、おとうさんにしかられた時、「私が切りました。」と、すなおにあやまつた、あの正直な少年ワシントンのすがたがうかんで来たのです。

次の日はあらしが過ぎさつて、からりと晴れたよい天気になりました。

リンカーンはぬかるみの道を歩いて、となり村へ急ぎました。「おじさん、おはようございます。」

クロホードおじさんは畑へ出て、あらしにやられたとうもろ

こしの手入れをしていました。

「ゆうべはひどいふりだったね。」

「実は、おじさん、ぼく、ほんとうに申訳のないことをしてしまったのです。」

リンカーンは、雨もりてワシントンの伝記をよごしてしまった事情をくわしく話して自分が不注意であつたことをあやまりました。

「新しい本を買ってお返しし

たいのですが、ぼくにはお金がありません。おじさんの家で三日間働いて、そのつぐないをさせてください。」

「おじさんはリンカーンのりっぱな態度に感心しました。働いてもらわなくとも、その気持だけでたくさんだよ。ワシントンの伝記も、わしの家に置いておくより、君にあげた方がよさそうだ。」

「でも、それではぼくの気持がすみません。」

リンカーンはすぐ畑にとびこんで、たおれたとうもろこしを引き起し、おじさんの仕事の手伝いを始めました。

この少年リンカーンが、大きくなってから、アメリカ十六代目のりっぱな大統領になったのです。

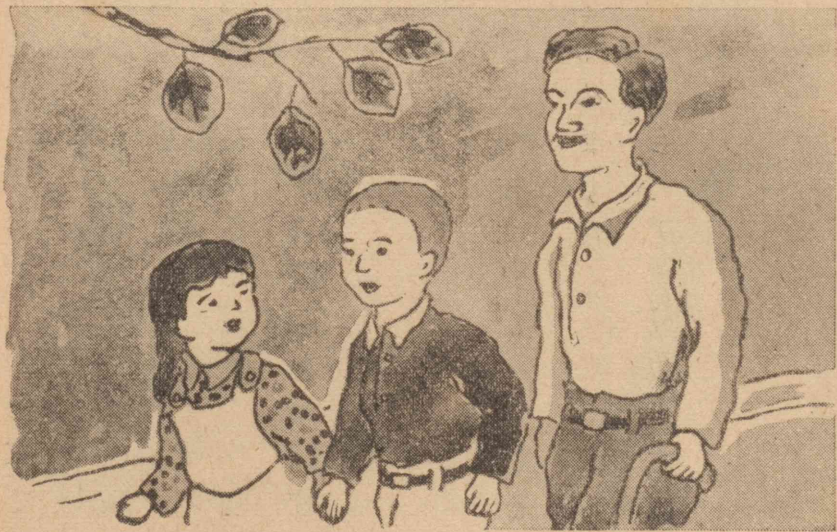


三 よいからだに育てよう

(一) 日曜日の朝

1

ひろし「さんとおとうさんは、いつも日曜日には散歩をします。きょうは日曜日です。ふたりは朝早く散歩に出かけました。妹のよし子さんもついて来ました。」



ん、朝の散歩は気持ちがいいですね。

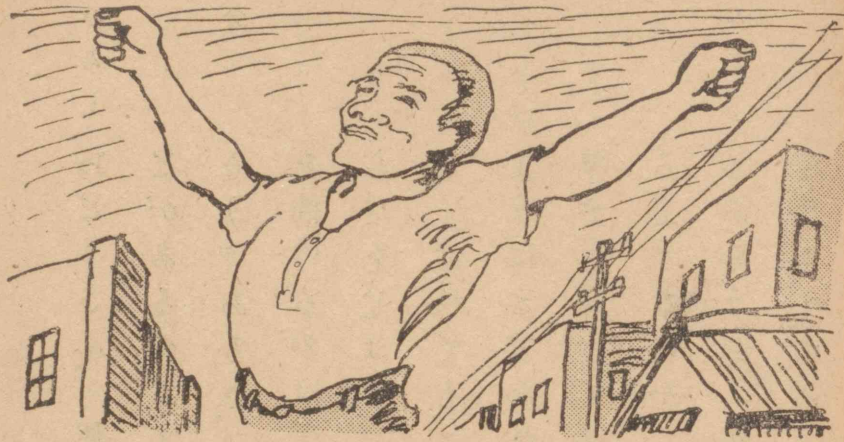
父 「うん、おとうさんは、日曜日にこうしておまえたちと散歩するのが、一番の楽しみだよ。」

よし子「どうして朝はこんなに気持ちがいいの。」

ひろし「決まっているじゃないか。空気がいいからだよ。そうです、ね、おとうさん。」

父 「そうだよ。だがもう一つだいじなことがある。それは、みんながゆうべぐっすりねむったことだ。じゅうぶん休息したあとでほどよい運動をすると、血のめぐりがよくなつて、気分がすっきりしてくるのだよ。」

ひろし「ああ、それでわかった。だから朝は勉強がよくできるのですね。」



おじさん「山田さん、おはようございます。」  
父「あいかかわらずお早いですね。きょうも体そうですね。」  
よし子「おじさん、体そうするの。」  
おじさん「ええ、三年も続けているんですよ。これをやらないと、おじさんは一日じゅう調子が出なくてねえ。」  
また、三人は歩き出しました。しばらく行ってよし子さんがふり返ると、おじさんはもう元気よく体そうを始めていました。

父「そうだよ、ひろし。これからは日曜日だけでなく、毎朝散歩することにしようか。」  
ひろし「ええ。ぼくはこれからもっと早く起きますよ。」  
よし子「おとうさん、わたしもいつしよに連れて行ってくださいね。」  
父「いいとも、いいとも。」  
三人は大通りに出ました。まだ、だれにも会いません。しばらく行くと新聞屋さんに会いました。駅へ急ぐ人も何人かいました。そのうち、朝日がさしてきました。方々で戸をあけています。かじ屋のおじさんが表へ出て来ました。

ひろし「おとうさん、朝日を浴びて体そうをすると、何かよいことがあるのですか。」

父「そりゃあるさ。何も朝日とは限らないがね。毎日体そうを続けるのはよいことだ。それに太陽の光の中には、からだをじょうぶにするものがいろいろあるのだよ。だから、学校でも、休みの時間には、なるべく外へ出て遊ぶようにと言われてるだろう。太陽の光に当たらないと、草や木だってりっぱに育たないのは、ひろしも知っているじゃないか。」

ひろし「ああそうか。空気と水と太陽とは、生物が育つために必要なんですね。」

父「そうだ。だから、朝のよい空気の中で、朝日を浴びることだけでも、非常にからだにいいんだよ。」

とうとう三人は大橋に着きました。川原におりました。しばらく休んでから、ひろしさんとおとうさんは、ならんで体そうを始めました。よし子さんも加わりました。

ひろし「ああ、ぼく、おなかがすいた。」

よし子「わたしもすいたわ。」

父「ではそろそろ帰ろうか。散歩したあとのごはんはおいしいぞ。おまえたちはこれからどんどん育っていくのだから、よく運動して、たくさん食べなければいけないよ。」

ひろし「ごはんはあんまり速く食べるといけないのでしよう。」

父 「うん、ひろしはいいことを知っているね。食物はよくかんで、ゆっくり食べることが大切だね。それから、どんなおかずでも、それぞれちがった養分をふくんでいるのだから、すききらいをしないことも大切なのだよ。」

ひろし「そうですか。じゃあ、よし子はきょうから、にんじんを食べなければいけないよ。」

よし子「にいさんだって、だいこんおろしをちつとも食べないじゃないの。」

父 「ははは、ふたりともきらいなものがだいぶんあるようだ。これからはそんなことをなくすようにしたいね。」

2

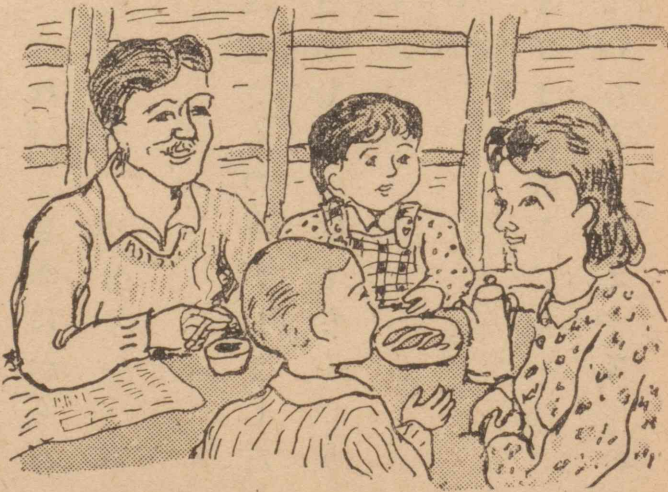
朝ごはんがすんでから、みんなは茶の間でけさの話の続きをしました。

よし子「おかあさん、わたしもあすから、おとうさんやにいさんと散歩に行くことに決めたのよ。」

母 「それはよかったわね。」

ひろし「散歩のほかにも、ぼくたちは、からだをじょうぶにするために、これからいろいろくふうしようと思います。」

母 「そうね。何事をするにもからだが第一ですからね。から



だをしようぶにすることを、いつもわすれないようにしなさいよ。」

父 「からだをきたえろといっても、何もむずかしいことではないのだよ。規則的な生活をしていけば、自然にからだはしようぶになっていくものなんだ。」

その時、表で、「ひろし君」とよぶただしさんの声がしました。ひろしさんは急いでげんかんへ出て行きました。間もなく、うれしそうな顔をして帰って来ました。

ひろし「おかあさん、ぼく、野球に行きますよ。」

母 「あんまり野球にむちゅうになっただら、かえって、か

らだをこわしますよ。」

ひろし「だって、おかあさん、日を浴びながら運動すれば、からだはしようぶになるんですよ。ねえ、おとうさん。」

父 「それはそうだが、あんまり無理をしてはいけないよ。ほどよい運動、ほどよい休息——これが健康を保つには必要だ。」

ひろし「では、どれぐらいがちょうどよいのですか。」

父 「それは人によっていろいろちがう。でも、自分でつかれたと思っっているのに、運動を続けるのはよくないね。」

ひろし「そうですね。じゃ、ぼくはだいたいじょうぶだ。おもしろくてちつともつかれはしないもの。」

母 「つかれないと言っても、ひろしはこの間、あせをふかな



いで、かぜをひいたでしょう。

ひろし「でも、あの時は薬を飲んで、一ばんで直りましたよ。」

母「そりや、直るのは直るでしょう。でも、ひろし、何も薬やお医者さんにかかったからと行って、からだがじょうぶになるものではありませんよ。薬やお医者さんは、悪くなつたからだを直すだけですからね。」

父「おかあさんの言うとおりだ。薬やお医者さんにたよるより、まずからだをきたえて、病氣にかからぬようにするのが一番だ。」

ひろし「わかりました。これからは、ぼくもからだのことを考えて遊ぶようにします。」

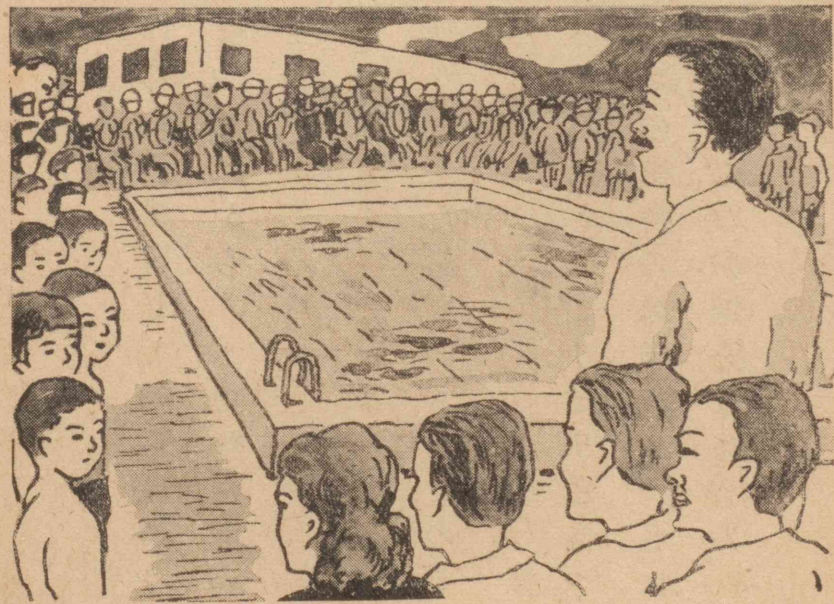
## (二) 水泳大会

土曜も日曜もなく、いっしょうけんめい練習して待ちに待った水泳大会も、いよいよきょうになった。からりと晴れた青い空には、綿のような白い雲が二つ三つういていた。

教室や運動場であいさつし合う、「おはよう」という声にも、なんとなく元気があふれ、みんな張りきった顔で、きょうのことを話し合っていた。

いつものように、六年生の自治委員のふえがピリピリと鳴つて、やがて朝礼が始まった。ぼくたちの受持の原田先生が台に立たれ、きょうの大会について、かんたんなお話をなさった。原田先生は水泳部の主任の先生である。

会場のつごうで 六年生から入場することになった。一年生がはいり終ったところは、せまい見物席はいっぱいになってしまった。プールの正面にはいすがきちんとならべられ、来ひんの人たちのすがたも見えていた。たて二十五メートル、横十五メートルのプールは、四角な大きなガラスのようであった。取りかえたばかりの水は青くすきとおって、底の白タイルのコース



ラインがはつきりと見え、ときどき風のふいてくるたびに、ゆらゆらとゆれていた。

四年生以上の出場する人たちは、すぐに泳ぐ用意をして、正面の右の決められた場所に集まった。

「ピリピリ。」原田先生のふえが鳴って、急に静かになり、開会式が始まった。あいさつの礼がすむと、校長先生から開会のことばがあった。

「ことしは、選手の人があんなにふえました。泳げる人がだんだん多くなるのは、ほんとうにうれしいことです。来年は、もっともっと多くなってほしいものです……」。

ぼくは「選手」ということばを聞いてはっとした。ただ出たいから出るだけなのに、「選手」といわれたので、なんだか急にえらく

なったような気がした。そして、急に責任が重くなったように感じられ、心の中で、すっかりやろうと思った。

校長先生のお話が終ると、しんぱんの先生から、競技についてこまかい注意があり、そのあとで、出場者だけ、準備運動をやった。

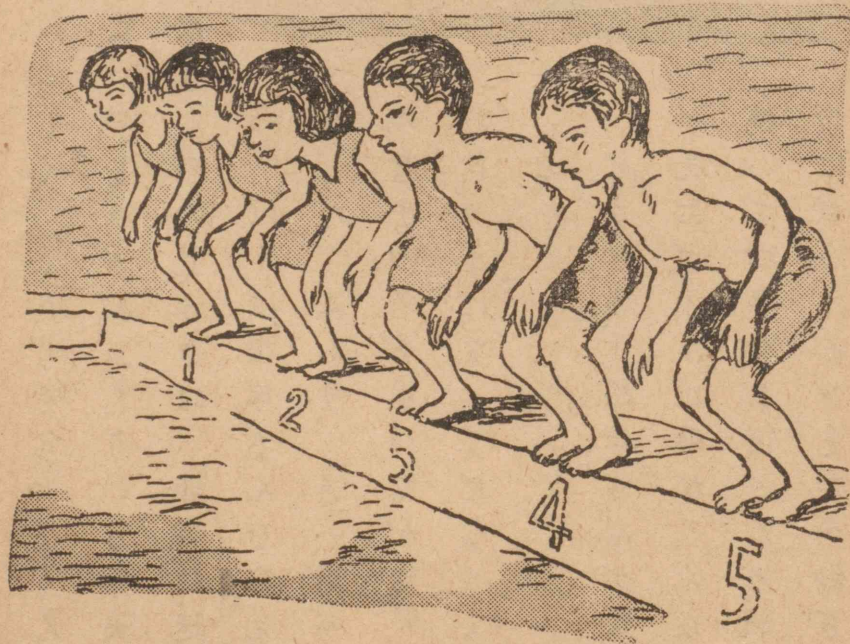
いよいよ競技が始まった。一番初めは二十五メートル自由形である。名前をよばれた七人の選手がスタート台に立った。四年生の男子がふたりで、五年生の女子が五人である。五年生はみんな、ぼくの級の入たちである。

「ビリビリビリ。」ふえが鳴って、スタート台の選手はいつせいに身がまえた。

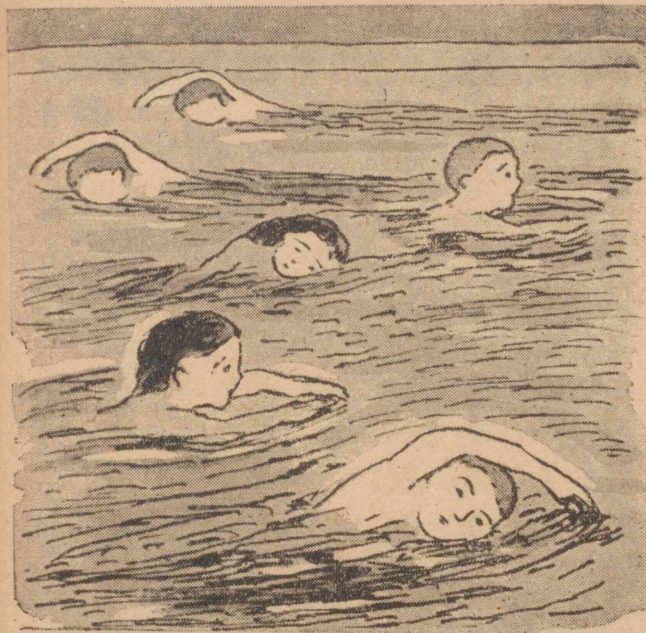
「用意。」大きな声。「どん。」七人の選手は飛びこんだ。ザブんと

いう水音とともに、水けむりが立ち、さわがしい水をかく音が、プールいっぱいひろがった。四年生ふたりだけがクロールで、女子はいろいろな泳ぎ方をしている。平泳ぎ、のし泳ぎ、犬かき、面かぶりのばた足だけで泳いでいる者など、ほんとうに自由形だと思った。

四年生のクロールは、じょうずとはいえなかったが、ほ



かの泳ぎに比べれば、やはり速いらしく、ふたりそろってぐんぐん進んでいく。女子五人のうち、のし泳ぎがふたりいる。大町さんと根岸さんとである。根岸さんののし泳ぎは、非常に速



い。ぼくは根岸さんを応えんした。みんな、思い思いの選手の名をよびながら、むちゅうになつてどなつて

いる。どうとう、根岸さんがまっ先にゴールに飛びこんだ。続いて四年生がほとんど同時にゴールインした。つき

つきと、あとの人たちも泳ぎ着いた。ぼくは、みんなが最後までよくがんばったと感心しながら、いっしょうけんめいにはく手をした。

次の二組は五年の男子ばかりであった。やはり七人で泳いだ。ぼくの級の青木君が、きれいなクロールで一等になった。三組は六年の男子ばかりだった。

こんどは二十五メートル平泳ぎである。これには、ぼくの級の上田君も出るはずだったが、あいにく、きのうからかぜをひいたとかで、きょうも学校に来ていない。

ぼくは、十五メートル自由形と、ご石拾いに出るのであるが、その十五メートル自由形がこの種目の次である。早くその番が来ればよいと思つたり、いつまでも来ない方がよいと思つたり

した。

とうとうぼくたちの種目になった。一組の中にはぼくの名前はなかった。ぼくは二組だった。七人の中で、五年生はぼくひとり、あとはみんな四年生の男子である。

ふえのあいずでスタートの場所に立った。むねがどきどきする。水はよくすんで、二メートル近くもあるプールの底が、ずいぶん浅く見える。ぼくは、この深い所で十五メートルを泳いだことはない。びりでもよいから、なんとかして泳ぎきりたいものだと思った。そしてプールの底に引いてあるコースの白線を、何本こせば向こうに着くか考えた。一本、二本、三本、四本……七本だと思ったとたん、「ビリビリ」と原田先生のふえが鳴った。



「用意、どん。」

ぼくは飛びこんだ。もう、むがむちゆうだった。息を止め、顔を水につっこんで、いっしうけんめい手足を動かした。白線も何もすっかりわすれてしま

った。苦しくなったので、急いで顔を上げて息をした。向こう岸のみんなの顔がちらっと見えた。すぐまた、面かぶりになつて泳いだ。なんだかからだが重くて、ちっとも進まないようだ。もう一度息をした。目をあけてみた。向こう岸の一だん高くなつた浅い所が見えた。もう少しだ。このぶんなら泳ぎきれそうだ。最後の力をふるい起して手足を動かした。やっどゴールに

着いた。ほっとしながら、岸に上がりかけると、後から三人泳いで来るのが見えた。よかった、泳ぎきれた。びりではなかった。しかし、等にははいれなかった。やっぱり、まだ、ぼくの泳ぎはものになっていないのだと思ひながら、もとの席に帰った。だれもかれも、みんな、ぼくを見ているような気がしてしやうがなかつた。

三組がすんで、四組の前島君たちが飛びこんだ。ゴールに着いた前島君は、一等か二等らしい。ぼくと同じで、十五メートルを泳ぐのはきやうが初めてだ。

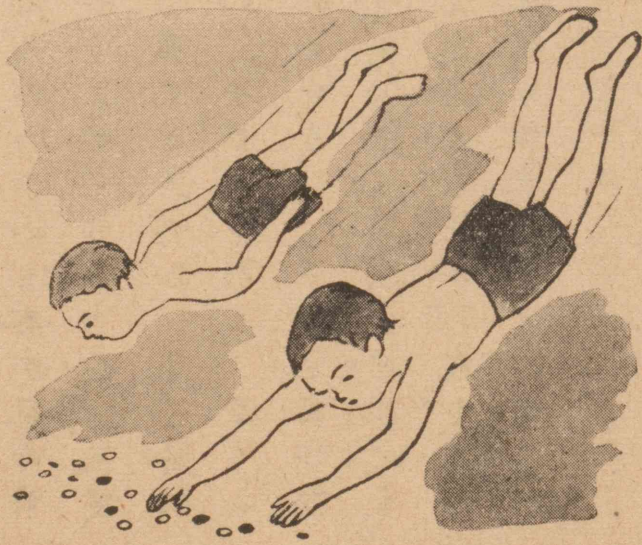
次にぼくが出るのはご石拾いである。それまでに、せん水がまんくらべや、五十メートル自由形などがあつた。ぼくはもぐりっここにも出たかつたが、二種目しか申しこむことができな

ので、しかたなくあきらめた。

「ご石拾いに出る人は、正面に集まってください。」

と、係の先生がよびにこられた。ぼくは、こんどは自信があつた。

一組は四年生ばかりで、五年の男子は全部二組だつた。一組の四年生たちは、いっしょうけんめいやつていたが、一つも取れない人がたくさんいた。そんなにもずかしいものかなど、ちよつと心配になつた。ぼくたちの番になつた。一コースの白線のあたりに、白いご石がたくさんばらまかれてあ



る。小さなご石が、五六倍ぐらいの大きさに見えてゆれている。「用意、どん。」ぼくはすばやく飛びこんだ。白いご石が目の前に見えた。飛びこんだ勢いで、すばやく二つ三つ取った。一度顔を出したら終りである。泳ぐ時には重いからだだが、もぐる時にはういてしまいそうではかたがない。手で水をかき、深くもぐろうとするが、なかなか思うようにいかない。やっと五つ取ったころは、もう苦しくてとてもがまんができない。とうとう顔を出してしまった。見ると、ほとんどみんな上がってしまった。ぼくが最後かと思ひながら先生に報告すると、あとから山口君が来て、

「先生、十二取りました。」

と言ったので、びっくりしてしまった。一つも取れない人がたぐささんいた。前島君は四つだった。山口君が一等で、ぼくは二等だった。

ぼくは生まれつき運動がにがてで、入学以来、運動会などで賞をもらったことは一度もない。水泳はかけ足などはちがうが、とにかく、運動で等にはいったのはこれが初めてだ。うれしくてうれしくてたまらない。自分の席に帰ってから、

「君はいくつ取った。君はいくつ取った。」  
と、みんなに聞いて回った。

このあと、五十メートル平泳ぎと水中かけ足があった。水中かけ足というのは、一コースの浅い所を、五人ずつ、かけ足で競走するのである。ほとんど泳げない人ばかりが出る種目で、かけ足といっても、実際は歩くよりしようがない。

これが終ると、番外の種目があった。二年生、三年生の中で、特に泳げる人たちが出るのである。二年生の小さい男の子が、じょうずな平泳ぎで五十メートルを泳いだ時は、われるようなはく手が起った。ぼくも、早くあんなに泳げるようになりたいと、しみじみ思った。

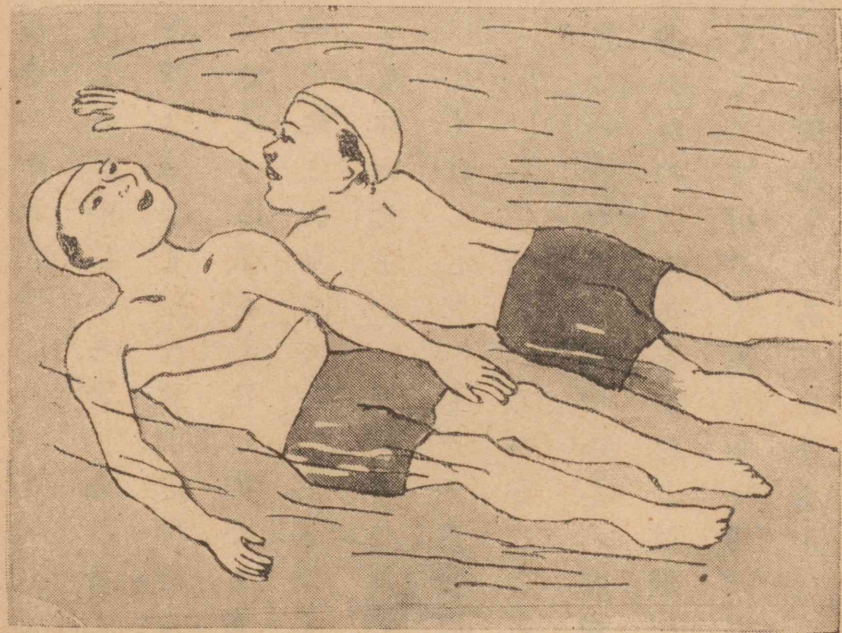
こんどは、男女ふたりずつの選手を一チームとした、地区別の百メートルリレーである。みんな総立ちになって応えんしたが、選手のそろっている北町が勝ってしまった。

大きわぎをしたリレーがすんでほつとしていると、原田先生たち五人の先生がたが、プールの横にやらんで立たれた。つきつきにふたりずつ組んで、いろいろな救助法をやってくださった。頭の毛をつかんで助ける方法や、後へ回って、わきの方か

らむねをかかえて助ける方法、だきつかれた時、いつしよにしないで、水の中でふりほどく方法など、いろいろあった。また、飲んだ水のはかせ方や、人工こきゆう法などは、説明を聞きながら見ていると、ぼくたちにもできそうな気がした。中でもおもしろかったのは、原田先生と田中先生がなさった、だきつくところであつた。泳ぎのじょうずな原田先生が、深い方へ泳いでいっておぼれたまねをし、「助けてくれ」とおっしゃった時は、みんな、どつとわらつた。ういたりしずんだりしているところへ田中先生が近づくと、原田先生はいきなりだきついた。田中先生はしずみながら、原田先生のかたの辺に足をかけ、け飛ばすようにしてふりほどいた。そして、すばやく深くもぐり、足を持って、くるりと向きを変え、原田先生のおごに手をかけ、



あお向きにさせながら岸に泳ぎ着いた。まるでほんとうのようにじょうずになされたので、ぼくは息をのんで見ていた。岸に着くと、ふたりとも、つかれたように「ああ」と言ったので、またみんながわらった。ぼくは、助け方にもいろいろあるものだと感心してしまった。きょうの種目のうちで、一番おもしろく、ためになったのは、この救助



法だった。

いよいよ最後は、先生がたのリレーである。八入ずつ赤白二組にわかれ、初めに、川村先生と小使さんの石川さんがスタートした。石川さんのめちやくちなクロールと、川村先生のかたぬき手では、かたぬき手の方が速かった。しかし、原田先生が、石川さんの組だからと思って、安心していった。そのうちにだんだん差が大きくなり、最後の原田先生が、もうれつな勢いで追いかけたが、とうとうわずかなちがいで赤組の勝ちになった。

競技はこれで全部終わった。やがてへい会式になり、正面に集まった選手たちに、賞品がわたされた。よび出し係の先生から種目ごとに名前をよばれると、元気よく返事をして、校長先生

の前に出て行く。ご石拾いの番がきた。

「二組、二等、小林君。」

とよばれた時は、なんとも言えない気持がした。

校長先生からへい会のことはあつて、ちようどお昼ごろ、  
会は終わった。

原田先生が、

「みんな、ほんとうによくやった。特に、きよう初めて十五メ  
ートル泳いだ人は、自信がついたろう。来年は、またがんば  
ろうね。」

とおっしゃった。

ぼくは前島君といっしよに、はればれとした気持で校門を出  
た。

#### 四 ことばのいろいろ

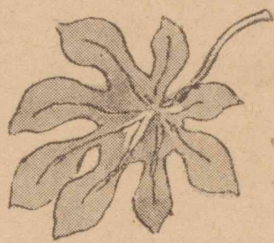
##### (一) 物の名前

物にはすべて名前があります。あなたのまわりの物を見わた  
してごらんさい。

つくえ　いす　こくばん　ほん　えんびつ

みな一つ一つ名前がありますね。もし物の名前がなかったら  
どうでしょう。「つくえ」というのに、「本を読んだり字を書いたり  
する台」でも言わなければならぬでしょう。ところが、ここ  
で使った「本」も「字」も「台」も物の名前ですね。もしこ  
ういう物の名前が全部なかったとしたら、わたくしたちはど  
んなに不便でしょう。

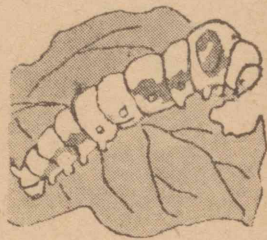
う。それですから、わたくしたち人間は、一つ一つの物にそれぞれ名前を付けています。また、何か新しい物を見つけたり、初めて作ったりすれば、すぐそれに名前を付けます。



それでは、どういうふうにして、物に名前を付けてきたのでしょうか。

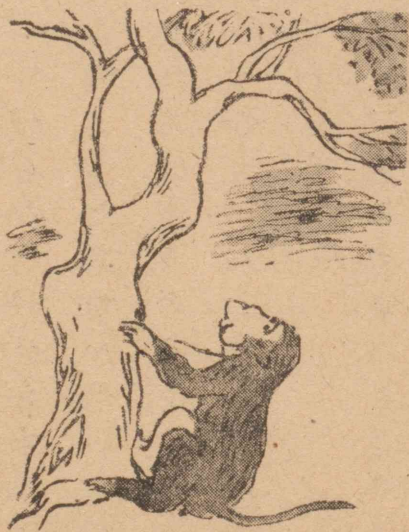


みなさんは、「やつて」という植物を知っていますか。「やつて」の葉は、ちようど人間の手をひろげたような形をしています。人間の手とちがつて八つに分かれています。そこで、「八つ手」という名前が付いたのです。海にいる「ひとて」というものも、人の手に似ているので、「人手」と名付けたのです。ちようや、がのよ



う虫を「いもむし」と言いますね。あれは、その形がごろごろと太っていて、ちよつと「さつまいも」の形に似ているので、こういう名前が付けられたのでしよう。「さ

るすべり」という木を見たことがありますか。木のはだはどんなふうですか。すべすべしていますね。それで、木登りのうまいさるでも、



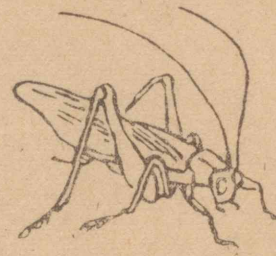
すべり落ちてしまふだらうというので、あの木は「さるすべり」という名前をもらったのです。このほかに、「さる」といえば、「さるのこしかけ」というきのこがあります。



す。木の幹にはえる大きなきのこです。これらは、おもに物の形を元にして付けられた名前でしょう。



また物の色によって付けた名前があります。「からす貝」というのは、貝がらの色が「からす」のうにまっ黒なので、このような名前が付いたのです。それから、生まれたばかりの子を、「赤んぼう」とか「赤ちゃん」というのも、からだ全体が赤みがかっているからでしょう。



物には音をたてるものがあります。そこで、その音に基づいてできた名前もあります。たとえば、あの秋に鳴く「すいっちよ」という虫は、その鳴き声をそのまま名前としたものです。「かつこう鳥」というのも、その鳴き声



から名前が付いたのでしょう。

そのほか、物の持っている、いろいろな性質を元にして付けられたものがあります。「じゃがいも」を、ある地方では、「にどいも」と言っている。

す。これは、じゃがいもが一年に二回とれるからです。また、くりの一種に、さんどくりというのがあります。これは一年に三回みのるからです。「かたつむり」を、ある所では「でんでんむし」とか、「でえてえむし」とか言います。かたつむりは、からの中にかくれたり、からの中から半分からだを出したりしますね。そこで、「からの中から出てこい」という意味で、「出よ出よ虫」と言ったところから、それが「でえてえむし」となり、「でんでんむし」となる。

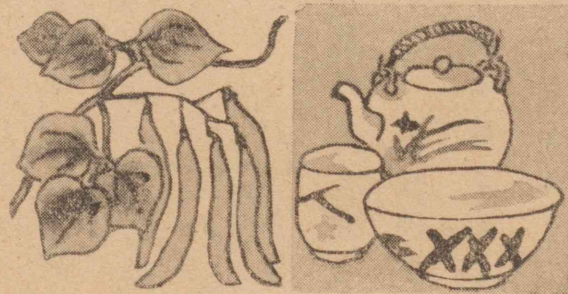


ったものと思われます。

しかし、物の名前には、このほか、そのものを始めた人や、産地の名を付けたものがあります。

「いんげんまめ」というのがありますね。むかし、いんげんというえらいぼうさんが、初めて中国からこのまめを持って来たといわれています。それで、こういう名前が付けられました。

どう器をせよものと言うてしよう。むかしから、愛知県の瀬戸でたくさんどう器が作られていました。それで、ここでできるどう器のことを「瀬戸物」とよびました。それがやがて、瀬戸以外の土地でできる物までも、「せよもの」というようになったのです。また、「じゃ



がいもや「さつまいも」も土地の名前を取ったものです。「じゃがいも」は初め、南方のジャガタラから日本にわたってきたというので、「ジャガタラいも」と言われましたが、のちにかんたんに「じゃがいも」とよぶようになったのです。「さつまいも」は、もともと中国からわたってき



たものです。まず中国から琉球りゅうきゅうにわたってきました。琉球では、このいもを「からいも」とよびました。それは、むかし中国のことを「から」と言っていたからです。その後、琉球から今の鹿児島かごしまの「薩摩さつま」にわたりました。薩摩では、琉球からわたってきたいもだというので、「琉球いも」とよびました。このいもはその薩摩から日本全国にひろがりました。そこで、薩摩という名を取って、「さつまいも」というようになったのです。

このように物の名前を調べてみるのは、なかなかおもしろいものです。しかし、たいていの物の名前は、どうしてそんな名前が付けられたかはつきりしません。「やまも」「まつも」「いぬも」などうしてこんな名前が付けられたかわかりません。中には別に意味のない音を、いくつか組み合わせて作ったものもあるようです。

「やま」などもおそらく、ヤという音とマという音を組み合わせただけのものと思われれます。

このような物の名前は、それぞれ物を言い表わすことばです。から、そういうものを同じなかまのことばとして「名詞」とよびます。「ちやわん」「つくえ」「やつて」「さつまいも」「コップ」「いぬ」などはみな名詞です。しかし名詞には物の名前だけではなく、「運動」「勉強」のように「遠足」などのように、事がらを言い表わすことばもはいます。「わたくし」「ぼく」「きみ」なども名詞のなかまにはいることばです。「ひとつ」「ふたつ」「一」「二」「十」などもそうです。あなたにも名前がありますね。あなたの住んでいる土地にも名前があるでしょう。そういうものもみな名詞です。

(二) こまかく言い表わす

おさない子供が犬を見て、  
「ワンワン」と言ったり、はとを  
見て、「ポッポ」と言ったりする  
ことがあります。おさない子  
供は、まだことばをたくさん  
知っていませんし、また、こ  
とばをいくつも組み合わせて  
言い表わすことも知りません  
ですから、あなたなら、「犬が  
いる。」とか犬がこちらへ来る。」



などと言うような時でも、おさない子供は、「ワンワン」としか言  
わないのです。

わたくしたちはおさない子供とちがって、犬がいることを、  
ただ「犬」とは言わないで、「犬がいる。」と、ことばをいくつか組み  
合わせて言い表わすのがふつうです。犬がこちらへ来れば、「犬  
が来る。」と言うでしょう。また、犬がクンクン鳴いていれば、「犬  
が鳴く。」と言いますね。もし、はとならば、「はとがいる。」は  
とが来る。」はとが鳴く。」と言うでしょう。

犬が いる。 はとが いる。

犬が 来る。 はとが 来る。

犬が 鳴く。 はとが 鳴く。

「犬」はと「は物」の名前で、前にも言ったように、名詞のなかまに

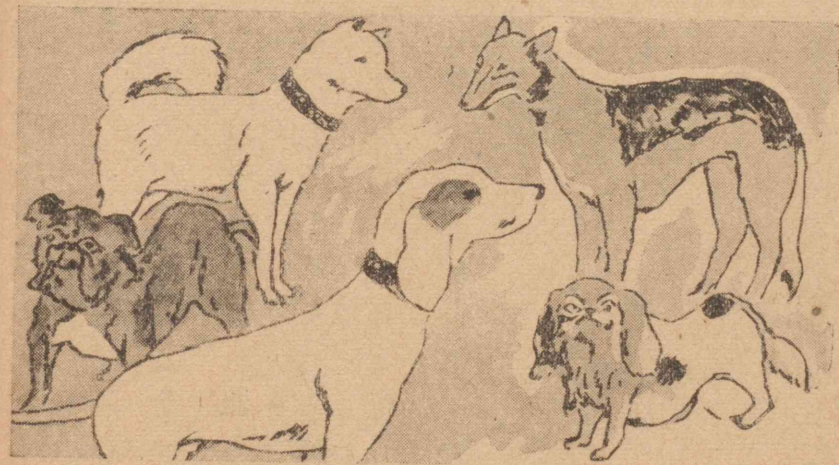
はいることばですが、「いる」「来る」「鳴く」ということばは、物や事がらの名前とは言えません。そこでこれらは、また別の集まりを作っていることばとして、「動詞」とよんでいます。

歩く 動く 飛ぶ 遊ぶ 帰る

光る さがす 歌う 起きる ねる

これらも動詞のなかまにはいることばです。

犬にもいろいろな犬がいます。毛の色が白いのもあれば黒いのもあります。赤いのもあります。また、からだの小



さいのもあれば大きいのもあります。そこで、もし白い犬がいたら、あなたは「白い犬がいる。」と言うでしょう。もし小さい犬がいたら、「小さい犬がいる。」と言うでしょう。この「白い」とか「小さい」とか、「黒い」「赤い」「大きい」とかいうことばは、名詞でもありませんし、また動詞のなかまともちがいます。そこで、「白い」「小さい」のようなことばは一まとめにして、「形容詞」と名付けます。

暑い 楽しい 早い 遠い 長い いたい

うすい 広い やさしい よい

これらも形容詞のなかまです。

形容詞は、

からだが大い。

毛が黒い。

夏は暑い。

校庭は広い。



のように、文の終りにも用いられます。

「歩く」は動詞でしたね。ところが、歩き方にもいろいろあります。それで、歩き方によっては、

ゆっくり 歩く。

という場合もありますし、

どんどん 歩く。

と言う場合もあります。そのほか、

のんびり 歩く。

のろのろ 歩く。

そっと 歩く。

などと言うこともあるでしょう。

この「ゆっくり」「どんどん」「のんびり」「のろのろ」「そっと」などは、一ま

とめにして「副詞」とよびます。

いきなり しばらく すぐ すっかり

たちまち たびたび ますます わざわざ

なども、副詞です。

今までお話ししてきたことで、ことばには、名詞とか、動詞、形容詞、副詞とかいう、ちがったなかまのあることがわかったでしょう。そうして、このちがったなかまに属することばを組み合わせていって、だんだんこまかく言い表わせるようになるのです。

とんぼが 飛ぶ。

赤い とんぼが 飛ぶ。

赤い とんぼが すいすい 飛ぶ。

五 私たちをつなぐもの

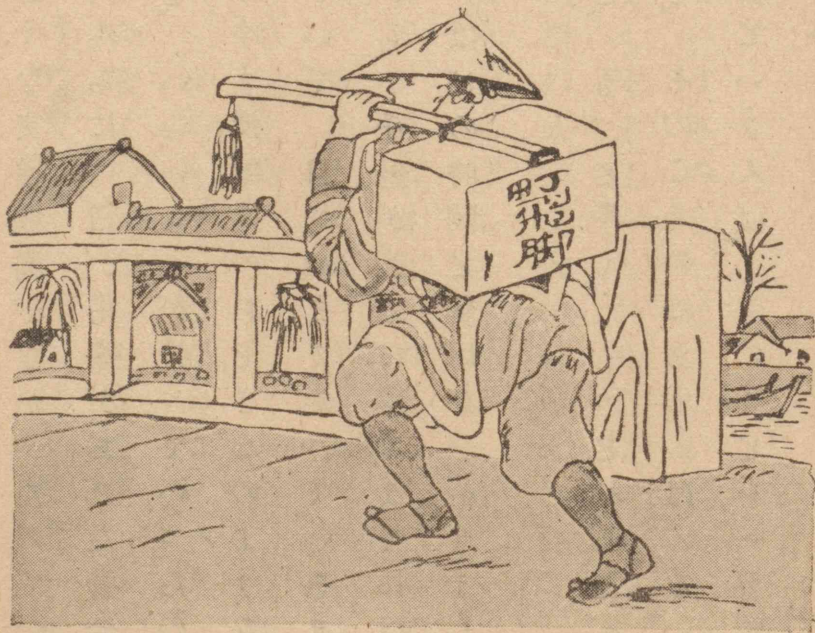
(一) ゆう便の始まり

1

私たちが生活している社会には、いろいろな仕組みがあります。ゆう便の仕組みもその一つです。

遠くはなれた所に住んでいるきょうだいや友だちに、何か用事がある時、私たちはその用事を手紙やはがきに書いて、ポストに入れます。そうすると、数日の後には、その手紙やはがきは先方の手元に届きます。こうして、東京にいても、北海道や

九州のような遠い所にいる人たちと、おたがいにその消息を知らせ合うことができるのです。このようなゆう便の仕組みは、なんと便利なものでありません。けれどもこのような私たちの生活になくしてはならないゆう便の仕組みも、むかしから今のように便利だったわけではありません。今から八十年ほど前まで



は、わが国には汽車や汽船のような交通機関がなかったので、遠くはなれた所に住んでいる人たちに、何か用事がおきた場合には、その用件を書いた手紙を、いちいち人が持っていったのです。飛きやくと行って、今のゆう便配達のおじさんのような人が、手紙を入れたはこをかついで、目的地まで走っていきました。そんなありさまでしたから、手紙が先方に届くまでには今から考えると、信じられないほどの時間と費用がかかりました。

そのため、人と人との通信を、もつと早く、もつとかんたんにできないものかという考えを、そのころの心ある人はみないだいていました。中でも前島密（ひそか）という人は、そのことを一番強く感じ、またいろいろと考えていました。

2

私たちの生活に重要な通信というものを、どうにかしてもつと便利なものにしたいと、いつも考えていた前島密は、明治三年五月に、通信の仕事をする役所の大切な役に任ぜられると、さつそく新しいゆう便の仕組みをしんげんに考えました。

前島がその役に任ぜられてから、ちょうど三日目のことです。東京と京都の間を往復している、役所の手紙の運送賃を書いた書類が、前島のところに回ってきました。それによると、役所で毎月飛きやく屋にはらう金が、平均して千五百両になっています。これを一年にすると二万両近くの大金になります。

このことから前島は、それだけの費用をかければ、通信の仕

事を政府の仕事にして、いっぱんの人々の便利を図ることができるといふ確信を持ちました。

前島はほとんど夜もろくにねないで、同一の料金で、だれでも自由に通信できるようなゆう便の仕組みを、いろいろと考えました。

しかし、今日のような仕組みが、すぐにできたわけではありません。前島があらゆる方面にたいへんな苦心をしたのは、いまでもないことでした。

### 3

その年の六月の末、前島密は急にイギリスに行くことになりました。上野という人に従って、財政方面のことを調べるために、出張を命ぜられたのです。前島は通信の仕事の後任の人にしたのんで、六月二十三日に横濱よこはまを出ばんしました。

ある日、前島が船のかんばんを歩いていると、

「あす、この船は、サンフランシスコ港を出ばんした船と、海上で行き合います。日本へ向けて出す手紙は、きょうじゆうに船内ゆう便局に差し出してください。」

という張り紙が、目に止まりました。

「船内ゆう便局とはなんだろう。」

そう思った前島は、すぐに船長室のとびらをたたきました。そうして外国人の船長から、外国におけるゆう便の仕組みについて、くわしく話を聞くことができました。

それまで、どうしてよいかわからなかったことが、いろいろ

はつきりしました。たとえばゆう便切手に消印をおすことで、切手を二度使うような不正も、防ぐことができるということがわかりました。

前島はさっそく後任の人にあてて、それらのことをくわしく手紙に書き、それを船内ゆう便局のポストに入れました。その時の前島の喜びはどんなであつたでしょう。

前島がアメリカに着いてみると、びっくりすることばかりでした。ゆう便専用の自動車や汽船があります。四頭立てのゆう便馬車が町の中を走っています。りっぱなゆう便局の建物がいたるところに見られます。

しばらくしてイギリスに行くと、ここではさらに大きな仕組みになつていました。ふつうのゆう便のほか、ゆう便がわせというものがあつて、自由にお金を送ることもできます。ゆう便貯金という仕組みさえあります。

前島はゆう便局へ出かけていって、自分あてにゆう便がわせを作り、差出人になつたり、受取人になつたりしました。ゆう便貯金にお金を預け、またそれをはらいもどしてもみました。このようにして、自分自身で体験してみると同時に、ゆう便の仕事にたずさわっている人々にも会つて、くわしくその仕組みを聞きました。

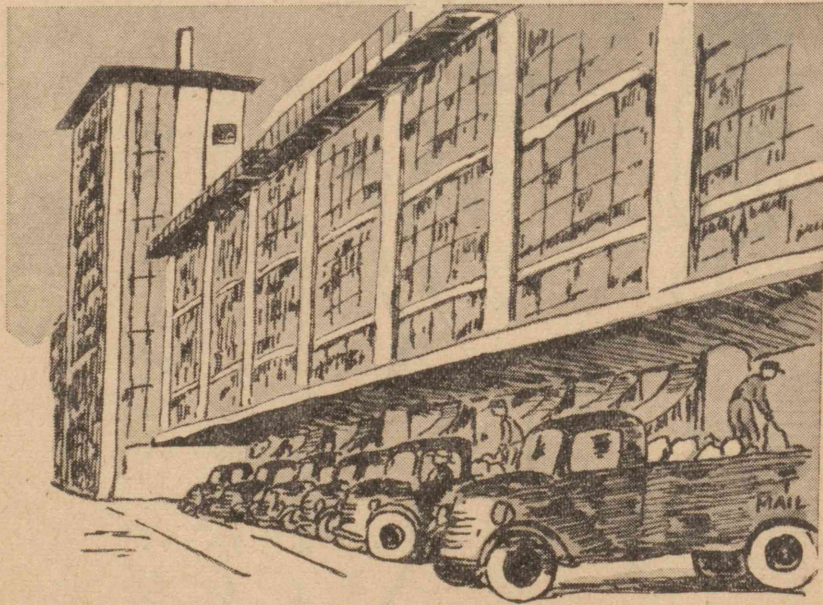
「日本に帰つたら、一日も早く、このようなりっぱな仕組みを作らなければならない。」

と、前島密は心の中でかたく決心しました。

明治四年八月、一年あまりの外国留学から帰って来た前島密のむねは、これから日本の国に新しいゆう便の仕組みをしき、国民のために、いろいろ便利を図ろうという望みでいっぱいでした。

帰って来た四日目に、前島は通信の仕事をする役所の長官になりました。そうしてよく年の五月には、日本全国にゆう便制度をしき、その仕事をすべて国家の仕事としました。前島はその後、今のような切手やはがきを作りました。切手にミシンを入れるようにしたのも前島が始めたのです。さらに、イギリスやアメリカのゆう便を手本にして、ゆう便局でかわせや貯金も

とりあつかうように仕組みました。私たちは、現在居ながらにして、遠い地方とたがいに通信することができます。必要に応じて、お金をかわせに組んで送ることができます。また、ゆう便貯金にお金を預けることもできます。このような便利な仕組みを、その始まりにさかのぼって考えてみた時、私たちは、その恩人として、この前島密をわすれることはできません。

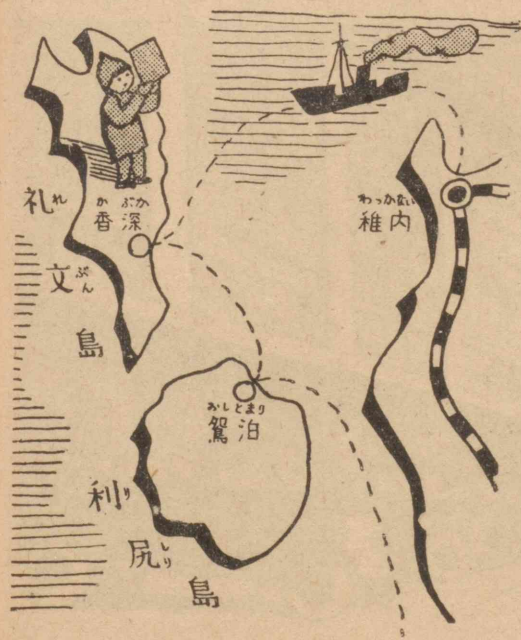


(二) 子供通信

次の三つの通信は、みなさんぐらいの少年少女が、いろいろな土地のようすを、知らせてよこしたもののの中から選んだものです。変わった土地の変わったありさまが、目に見えるようにわかるでしょう。

礼文島

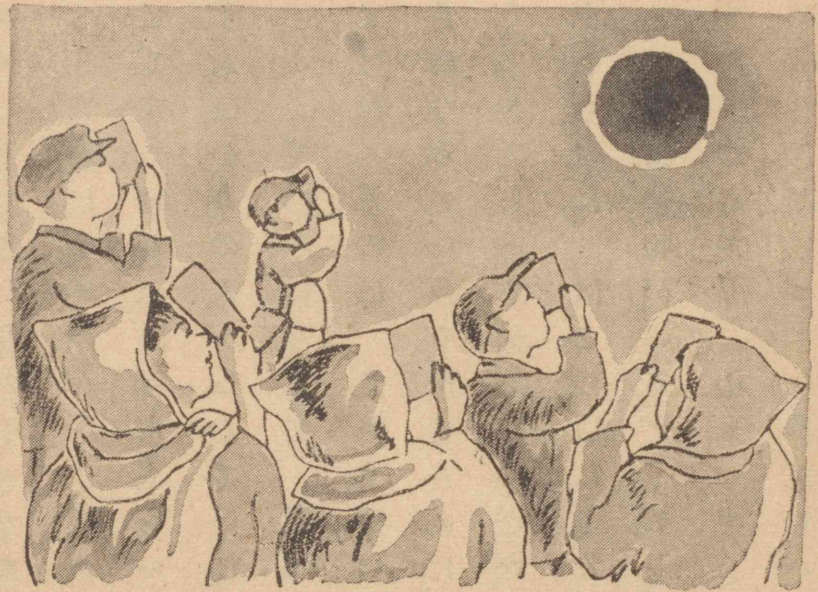
私たちの住んでいる礼文島は、北海道の稚内から六十キロメートルの西にあって、まわり七十キロメートル、面積三十平方キ



ロメートルばかりの小さな島です。

礼文島に日本人が移ってきたのは、今から二百年ほど前のことです。はじめは百人ぐらいだったといわれますが、今では五千入ばかりの人が住んでいます。

ここでは冬になると、屋根に届くほど雪がふります。それとけ始めるのは、三月も半ばを過ぎてからです。そしてそのころになると、魚を取るために、方々から人々が大勢集まって来て、さびしい島が急ににぎやかになります。大きなしんがたくさん取れ、はまにはしんの銀の山ができます。初夏になると、高山植物がいろどり美しくさきみだれます。私たちは野原で草をつんだり、小鳥の声を聞いたりして遊びます。このころが私たちにとって一番楽しい季節です。



この日本の北のはずれにある  
小さな島も、昭和二十三年五月  
九日の日食の時、観測地点とし  
て選ばれてから有名になりました。  
私たちもいぶしガラスを作  
って太陽を観測しました。太陽  
が欠け始めて、あたりがうす暗  
くなると、からすが夕ぐれの時  
のようにさわぎ始めました。そ  
のうちに人の顔が見えないよう  
になり、太陽は、まるで金の指  
輪のように、ふちだけがまるく

きらきらかがやきました。あつと思つているうちに、あたりが  
明かるくなり、からすが夜明けの鳴き声をたて、人の顔がだん  
だんはつきりとしてきました。この時のきんかん食の美しさを  
私たちは決してわすれることができません。

### 木曾

どこまでも続く緑の山また山、ここは木曾の山おくです。昼  
でも暗い木立のしげみをぬって、どこからともなく木を切る木  
こりのおのの音が聞えてきます。晴れた日には、このおのの音  
が一だんとさえて、川の面にひびきわたり、さかんに材木が川  
にそつた森林鉄道で町へ送り出されます。

国有林の中では、いろいろな鳥が楽しそうにえだからえだを



飛び回り、りすやうさぎもすの  
中で遊んでいます。

こういう山の近くに住んでい  
る私たちは、鳥のすばこを作っ  
て、益鳥を保護し、森林をいた  
める害虫をなくして、よい木を  
山一めんにしげらせるように努  
めています。

林の中を流れる水は、谷間谷  
間を伝わり、王滝川へ流れこみ  
ます。この王滝川に三浦ダムと  
いう大きな貯水池があります。

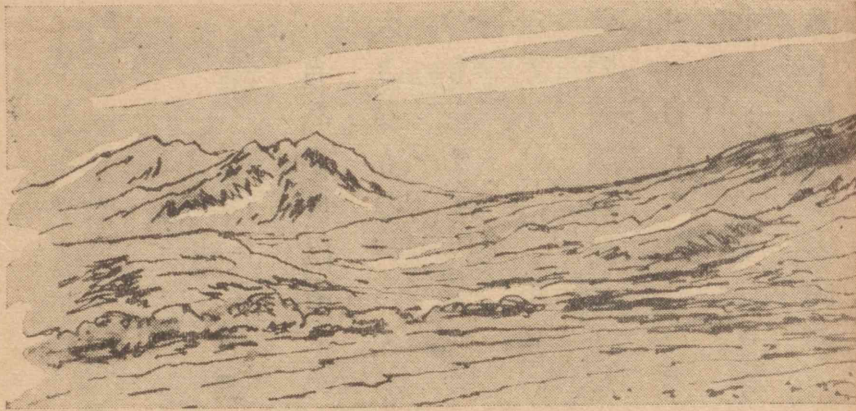


はるかにアルプスの山々が見えるこの貯水池は、面積が三百ヘ  
クタールもあり、東京の大きなビルディングが、三つもすっぽり  
はいるという広さです。

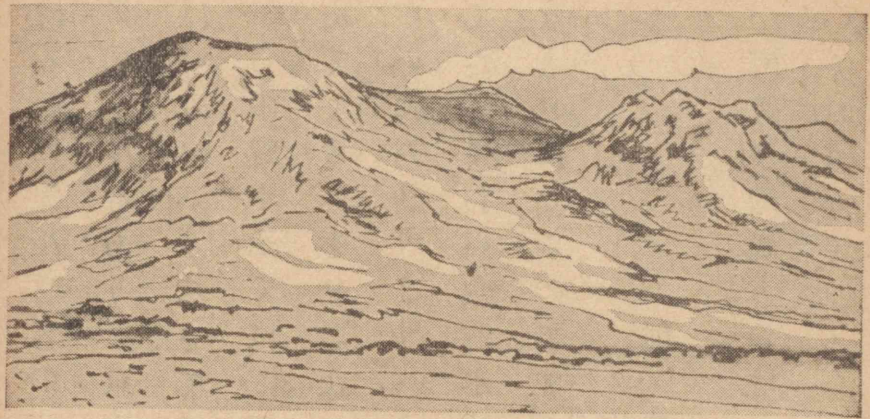
この貯水池では、四月になると多くの水門をしめて、流れこ  
んでくる水をせき止めます。すると十二月までには、水は池一  
ぱいにたまります。こうして、川に水が少なくなる冬にそなえ  
てためておいた貯水池の水が、木曾川にある多くの発電所のみ  
なもとになるのです。

### 阿蘇山

阿蘇の野焼きのけむりが見え始めると、もう間もなく春です。  
いく日もいく日も、四方の山が焼け続けます。この私たちの住



も秋のころが一番です。  
九月から十月にかけて、山の大気はいよいよよすんできます。ふだんは見えない遠くの九重山じゅうじゅうざんが、晴れた日には、東北方の外輪山のはるか向こうに、らくだのこぶのようにくつきりとういて見えます。そして、南の方をふり返ると、ちよう上からたち上っているけむりが、美しくたなびいています。こういう晴れた秋の日、ひろびろとした牧場を見おろしながら、りんどうの花がさきみだれている山路を歩くのは、とてもよい気持です。



んでいる坊中の町では、夜になると、山ぶくのあちらこちらで燃える、野焼きのほのおを見ることができます。この野焼きがすむと、阿蘇の山はだはすっかり黒くなります。  
それから一月もすると、その山はだは青々としたわか草でおおわれます。そのころになると、草千里の放牧場では、いたるところで母馬と子馬が、なかよくならんで草を食べているなごやかな情景が見られます。  
しかし、阿蘇の美しさはなんと行って

六 人の力

(一) 自然を利用する

自然界には多くの動物が住んでいます。象やくじらのような大きなものがいるかと思えば、うさぎやリスのように小さなものもいます。また、とらやわにのようにおそろしいものがあるかと思えば、小鳥やちようちよのようによさしいものもいて、その種類と数とはたいへんなものです。しかし、どの動物もみな、自然の物や自然界のできごとをうまく利用するか、またはそれと戦って、自分たちの生活をしている点は同じです。動物はしばらくの間も、自然をはなれることはできません。たとえ

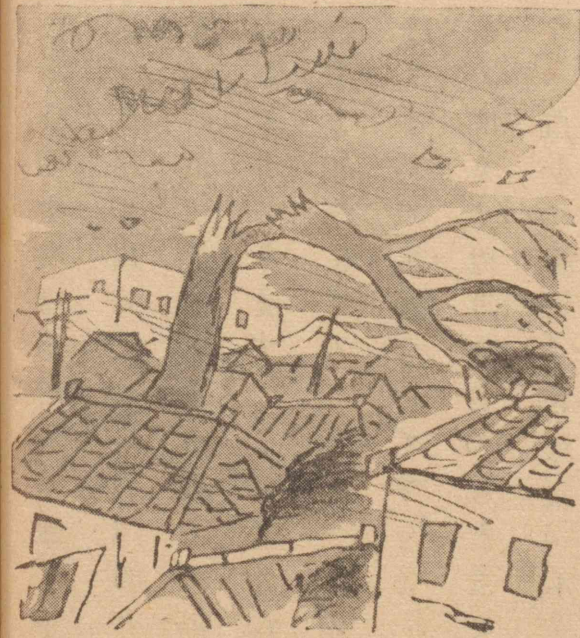
ば、小鳥の生活を考えてみても、小鳥の食物は木の実や虫です。また、大雨の時には、ぬれないように木のほらにかくれます。



活が、どんなに自然と深い関係を持っているか、自分で考えて  
ごらん下さい。

寒い冬には、南の国へ飛んでいくものもあります。このように自然を相手にすることが、そのまま小鳥の生活なのです。人間もやはり動物のなかまです。ほかの動物と同じように、自然をはなれて生活することはできません。私たちの毎日の生

このように、ねていても起きていても、いつも相手にしている自然に対して、人間がある時は親しみを、またある時はおそれを持つのは当然のことです。時には友だちのように思い、時にはおそろしいもののように思います。しかし自然界にあるすべてのものには、私たちがどんなにおそれても親しんでもこちらの気持は少しも通じません。「いやな雨だ、早くやんでくれ」「おそろしいあらしだ、ひどくならないように」と願ってもいいのって、少しも聞いてくれません。雨やあらし



があるのは、低気圧やたい風が来ているからです。これらのものは、私たちの願いや希望を聞く耳を持たないので、情を知らないようにも思えますが、たい風が過ぎさると、知らぬ間に雨風はおさまっていて、朝になってみると、秋晴れのよい天気になっていくこともあります。こんな日は、私たちにとって気持のよいものですが、自然が別に親切で、こういうよい天気にしてくれたのではありません。ただそのように風を起し、雨をふらせ、また日を照らしていくのが、自然の性質なのです。

このように自然というものは、私たちに都合のよいこともあれば、また悪いこともあります。私たちはこれを利用したり、これと戦ったりする時、たとえば、食物を食べたり、着物を着て寒さを防いだり、家をこしらえたり、病気になって薬を飲ん

だりする時、成功すれば喜び、失敗すればがっかりします。しかし、私たちは、ただそれだけですましてしまうことはありません。ああすればよかった、こうしたのでしくじったのだと、子供でも考えるにちがいません。これが私たちの知識を得るもとなのです。失敗には失敗の原因があります。また、成功したからといって、それで満足してしまつては、進歩はありません。

成功や失敗の原因をさぐっていくうちに、私たち人間の願いや希望によつては動くやしない「物の性質」、または「自然のほんとうのすがた」を知るわけです。高いところから低いところへ流れるのは、水の性質です。その性質は、決して変わることはありません。きのうは、高い所から低い所へと流れていた水が、



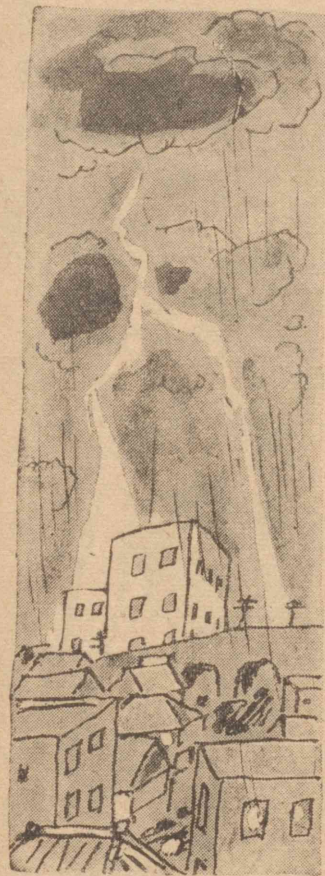
きょうは逆に、低い所から高い所へ流れ、あすは、はたしてどうなるかわから

ない。というようなことは決してありません。物にはそれぞれ性質があつて、みだりに変わるものではなく、自然界のできごととは、すべてこの物の性質に従つて起るのです。どんなことでも、気まぐれに動くものではありません。ちよつと見るとこみいつているようでも、よく調べてみると、そこにはちゃんとしたきまりがあるのです。

このような自然のきまりのことを、自然の法則といひます。

この自然の法則をさがす学問が、科学です。

このように、科学によって、一度物の正体をはっきりするとたとい、それがほんとうにおそろしいものであっても、それをさけたり防いだりする方法がわかり、もうおそろしがる必要がなくなりません。そればかりでなく、さらに進んで、その物をうまく使って、私たちの役に立てることができません。



むかしの人には、かみなりの正体がわかりませんでした。それで、どうして防いでよいかわからず、くわばら、くわばら、と言ってみたり、

せんこうを燃やしたりしましたが、それはほんの気休めにすぎませんでした。ところが今では、その正体が電気であることがわかって、一本のひらいしんを立てるだけで、まず、安心していることができます。

このように、科学はかみなりの正体を明らかにしたばかりでなく、その正体である電気を自由自在に使って、今日のすばらしい電気の文明を作り上げました。

電気の文明に限らず、いっばんに私たちの文明とか、文化とかいうものは、自然をうまく利用することが、その元となっています。ですから、自然の正体を知る科学は、私たちの文明の元と言えらると思います。

(二) 電燈の話

千八百八十二年(明治十五年)十一月一日の夜、日本で初めて、東京の銀座の町に電燈がともされました。見物に集まって来た人たちは、

「遠くはなれた所でも明かるいぞ。まるで、夜のない国に来たようだ。電燈ほど明かるいものはあるまい。」  
などと言って、おどろいたそうです。

むかしの人は、ほたるの光や、まどの雪明かりで勉強したということですが、毎夜、私たちが明かるいへやで、本を読んだり字を書いたりできるのは、電燈のおかげです。電燈をつけるには、パチツとスイッチをひねればよいのですが、電燈を知ら

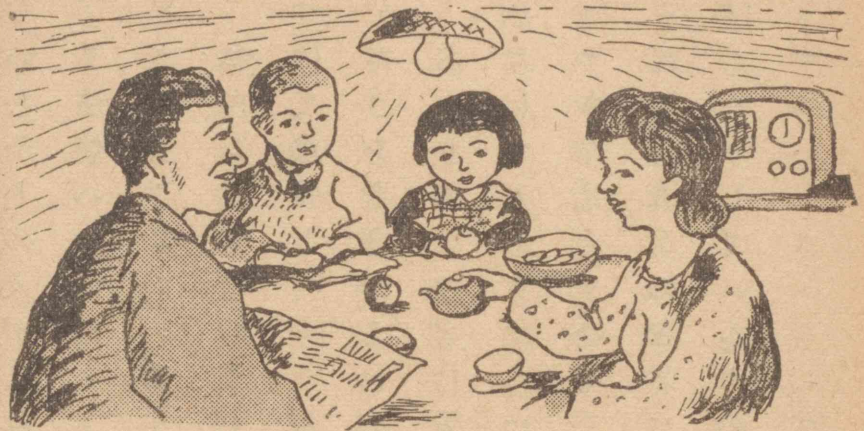
ないむかしの人がこれを見たら、びっくりして、

「ま法使いの火だ。」

とさけぶことでしよう。

私たちは電燈の便利なことになれてしまって、毎夜、電燈をつけて勉強したり、遊んだりしていながら、あまり電燈のありがたさを考えたことがありません。

あらしの夜などに電燈の消えることがあります。ろうそくをともしても本を読むには不便ですし、へやのすみなどは暗くはつきり見えません。そんな時に、また、パツと電燈がつくとそれこそ真昼の世界に返ったようです。今までろうそくの光でぼんやりしていた本の字が、はっきり読めるようになります。うす暗かったへやのすみずみも、明かるく照らし出されます。



心の中まで明かるくなつたような気がします。

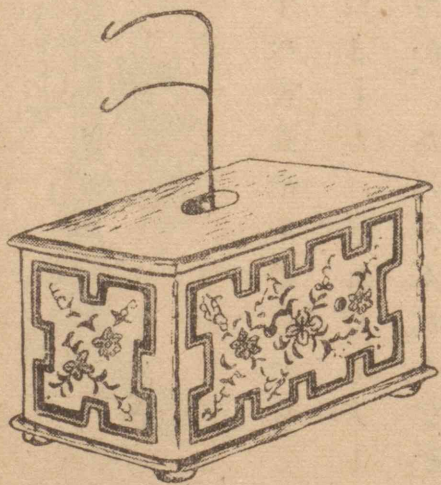
このように、人間の生活になくはならない電燈が、電気のかでつくことはもうだれも知っています。それではこの電気の働きに初めて気が付いたのは、いつごろだつたでしょうか。

今から二千五六百年前、ギリシアの国の人、こはくの玉を布でこすると、かみの毛や糸くずのような軽い物を、すい付ける力ができることを知っていました。しかし、ギリシア人は、電

気のかをはつきり知っていたわけではありません。人々が電気のかをはつきり知るようになったのは、三百年ほど前からです。日本では、千七百七十六年(安永五年)平賀源内（なづな）という人がオランダ人の作った機械を見て、初めて電気を起す小さな機械を作りました。その時の機械は今も残っています。

けれども、そのころはまだ、電気がろうそくやランプのように、夜を明かるくできるなどと考えた人はありませんでした。

電燈が初めてできたのは千八百八年で、イギリスのハンフリー・ダービーという人が作ったのです。





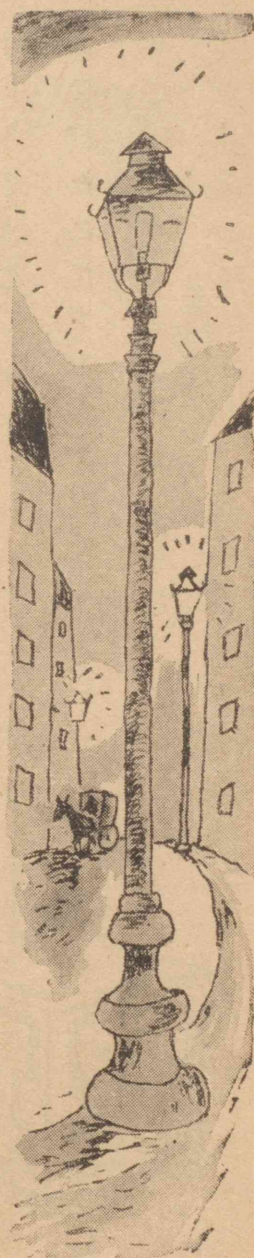
この電燈はアーク燈といいますが、千八百五十年ごろから、フランスのバリなどでいろいろ燈に使われました。けれどもアーク燈は、町を照らすのには役立ちましたが、たいへん熱くなるので、家の中に使うことはできませんでした。

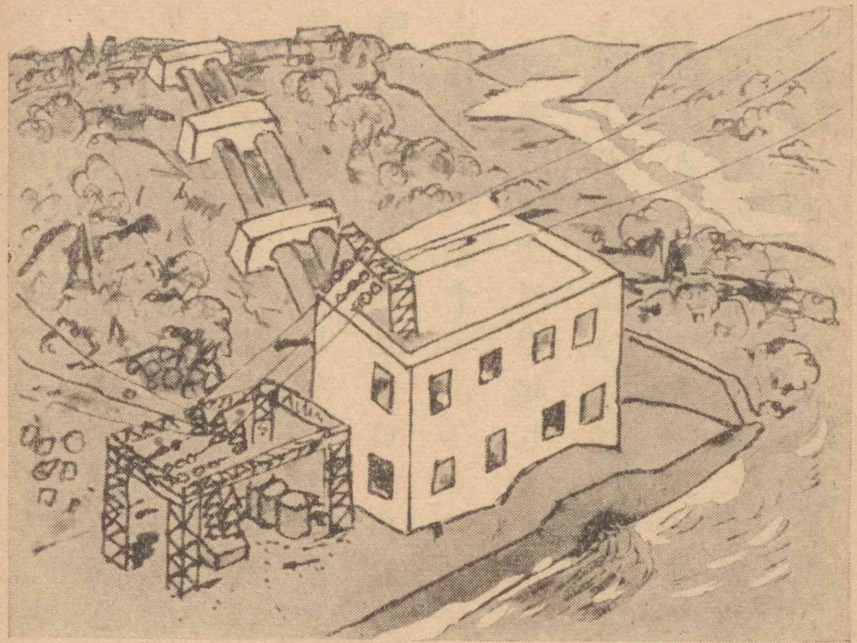
私たちがいま使っている電球は、アメリカのトーマス・エジソンが発明したものです。エジソンは初め、うすいガラスで作ったたまの中で、白金の線に電氣を通して光を出しましたが、後には、白金の線の代わりにカーボン線を使いました。カーボ

ン線は白金の線とちがって、たやすく手にはいるので、カーボン線の電球ができてから、電燈はどの家でも使われるようになりました。

エジソンがカーボン線の電球を作ったのは、千八百七十九年の十月のことでした。けれども、カーボン線は切れやすい上に暗いので、今では、じょうぶで明かるい、タングステンの線が使われています。

電氣は発電所で起します。いく本もならんだ大きな鉄管で、山の上からたくさんの水を流し落し、その力で、電氣を起す機械を動かします。発電所の中では、流れ落ちる水の音や、回っている機械の音が、ゴウゴウとうなっています。水は高い所から落ちるほど力が強くなります。水の方が強ければ強いほど、





機械は強く回ります。電気も  
たくさん起ります。

発電所は、たいてい町から  
遠くはなれた山の中にあるの  
で、電気は、発電所から送電  
線で、町まで送られて来ます。  
送電線は、送電とうから送電  
とうへと、山をこえ、野をこ  
え、川をわたって、いく十キ  
ロ、いく百キロと続いています。

むかし、ギリシアの人が、

こはくの玉を布でこすって起した電気力は、軽いかみの毛や、  
糸くずを引き付ける力しかありませんでしたが、発電所から送  
電線で送り出されて来る電気は、大きな電気機関車を、何台も  
全速力で走らせたり、方々の工場の重い機械を、軽々と動かし  
たりする強い力を持っています。

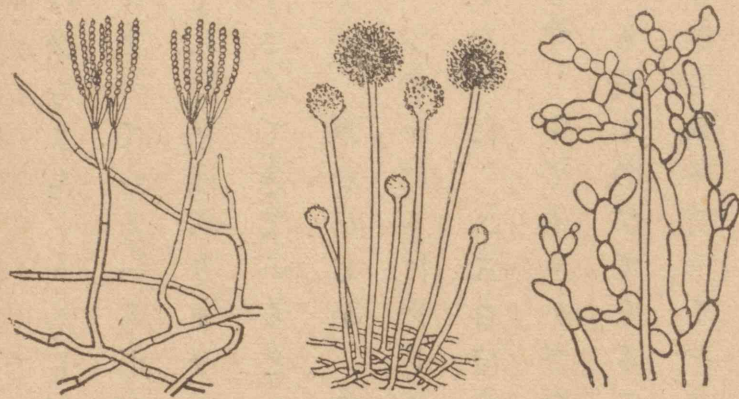
発電所の建物や送電とうに、「きけん」という赤いふだがかけて  
あるのは、もし私たちが注意せずに近づくと、けがをしたり、  
命を失ったりすることがあるからです。送電線を流れる強い電  
気は、変圧器という機械で弱められ、私たちの家に送られて来  
ます。しかし、弱められていっても、まだまだ注意しな  
ければいけません。ぬれた手で電燈をつけたり消したりするこ  
とは、やめなければなりません。

明かるい電燈の下で、本を読んだり字を書いたりできるのは、なんと便利なことでしょう。しかし私たちは、この電燈がつくまでにいろいろとくふうをした人々や、遠い山おくの発電所で働いている人々や、また送電線や送電とうを作った人々に対して、いつも感謝の心を持たなくてはならないと思います。

(三) かびの働き

もちやパンにはえるあのかび、また、じめじめしたつゆのころに、着物やくつにまではえるあのかびは、だれにもきらわれまずね。

ごはんにかびがはえると、いつの間にかあまみがつき、ぶどうのしるにかびがはえると、よいにおいがしてくることを、み



なさんは知っていますでしょうか。人間はむかしから、かびの、このふしぎな働きに気が付いていて、あま酒を作ったり、ぶどう酒をこしらえたりしました。では、このふしぎなかびの正体を調べてみましょう。

かびの正体は、けんび鏡で見ると、細いくもの糸のようなものです。この糸をきんしといえます。その糸のどころどころにえがでていて、その先に、ほうしとよばれるつぶつぶが、たくさんかたまつてついています。このほう

しが風に飛ばされて、どこかしめつた所へ落ちて芽を出すと、それからまた、きんしが出て来ます。このほうしは、かびの種類によっていろいろ形がちがい、また、色もまちまちです。きんしには色はありませんが、ほうしに色があるので、ほうしがたくさんできていると、かびに色が付いて見えるのです。青かびとか、黒かびとか、赤かびという名は、そこから出たのです。パンのかけらに少しさとう水をかけて、しめりけの多いあたかな所に、二三日ほうつておくと、いろいろなかびがはえてきます。中でも毛かびなどは、人間のかみの毛のように、数センチも長くのびてくるので、きつとびっくりするでしょう。

今から数年前、イギリスの総理大臣をしていたチャーチルが、おもいはいえんにかかつて、命もあぶないといわれたことがあ

ります。その時、ペニシリンという薬を注しやしたところ、わずか三日ですっかりよくなったので、世界じゅうの人々は、たいへんおどろきました。このペニシリンというのは、今から約二十年ほど前に、イギリスの科学者、フレミングが発見したペニシリウム・ノタートゥムという一種の青かびから、フロレーイとチェインとを中心とする、熱心な学者たちが作り出した薬なのです。あのきたない青かびに、死にかかった命を助けてもらった人が、世界じゅうに、もう何万人いるかわかりません。かびの力もなかなかばかにはできません。

かびはごくありふれたものなのですが、そのありふれたものの中から、今までに多くの学者が、多くの有益なことを発見してくれました。ペニシリンはそのうちの一つなのです。

七 助け合い

出る人

イソップのおじさん

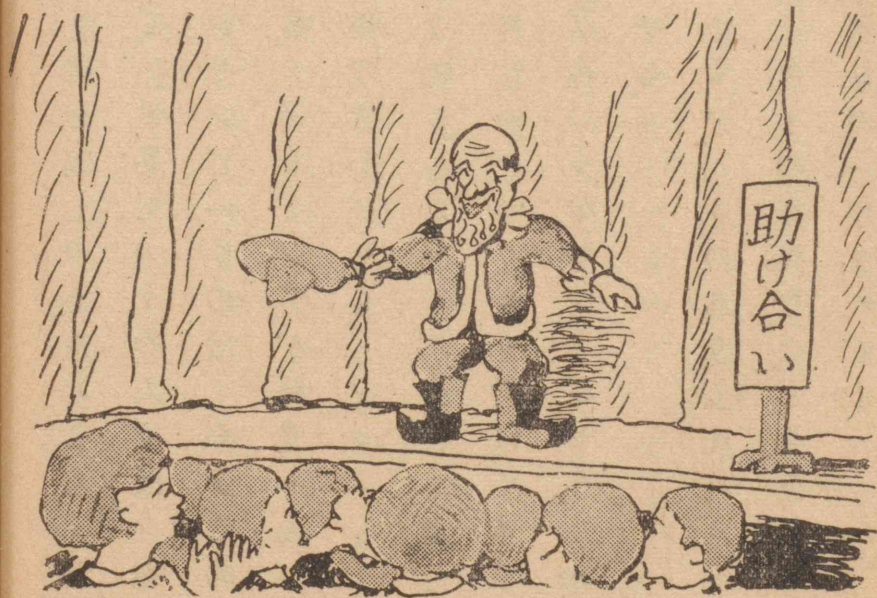
ねずみ

からす

かめ

かもしか

りょうし



(一)

ベルが鳴ると、まくの前にイソップのおじさんが出て来る。古めかしい洋服を着て、白いひげをはやしている。

イソップ(歌う)「もしもしかめよかめさんよ、

世界のうちでおまえほど

歩みののろいものはない、

どうしてそんなにのろいのか。

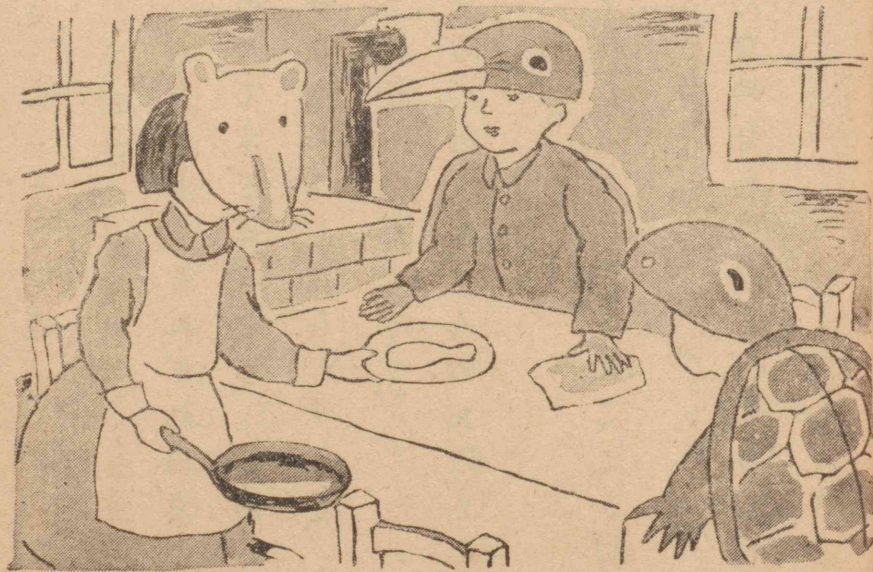
このわたしが、『うさぎとかめ』の話を作ったイソップおじさんです。わたしは、むかしむかし、おもしろい話をたくさん作りました。あんまりたくさん作ったので、自分

でもわすれてしまったのがあります。きょうは、みなさんといっしょに、そのわすれてしまった話を、一つだけ思い出してみましよう。」  
と言って、まくを自分で開く。

### 一の場面

森の中にある一けんの家内部。へやのまん中にテーブルがあり、そのまわりにいすが四つ置いてある。上の台所では、白いエプロンをかけたねずみのおばさんが、ごちそうを作っている。からすがテーブルの上をふいている。明かるい、楽しそうな音楽が流れて来る。

ねずみ「さあ、からすさんのすきな  
どじょうのフライができましたよ。  
（かめがそれを受け取る  
うとする） あら、かめさんは  
手伝わなくてもいいのよ。  
からす（おさらを受け取って） 「かめさん、  
君はせなかにおうちを  
しよつていて、動くのに不  
自由なのだから、手伝わな  
くてもいいんだよ。」  
かめ「でも、ぼくも何かしないと  
すまないからね。」



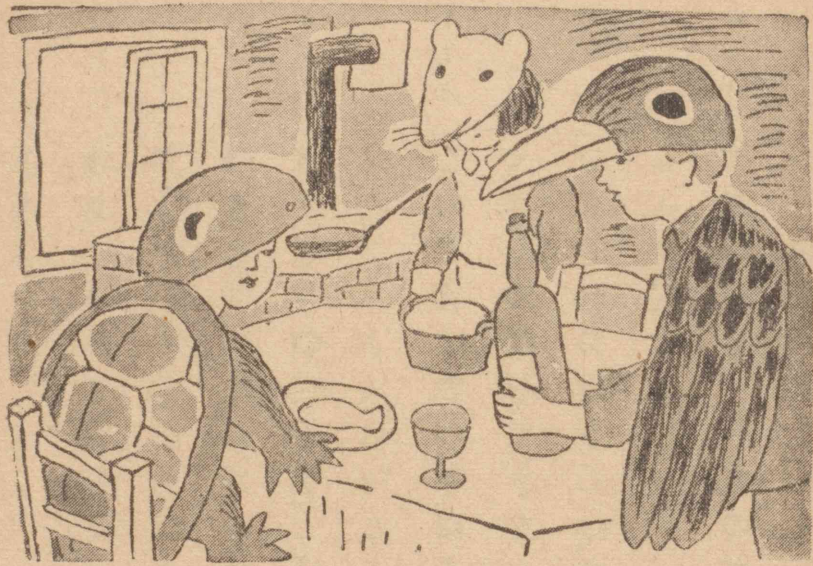
からす「そんな心配なんかいらなさいさ。ごちそうを運ぶぐらいな  
んでもないよ。」

ねずみ「そうよ、そんなえんりよはいらないわ。それぞれ得意の  
仕事があるんですけども。すわってする仕事なら、かめさ  
んにしてもらうし、こんな仕事はわたしたちがするし、  
急ぎの用はかもしかのおばさんが一番だし……。」

からす「ごちそうをさがして引いて来るのは、ねずみのおばさん  
にかなわない。」

ねずみ「だからかめさん、そんなこと気にせず、いすにこしかけ  
て待ってあげればいいのよ。」

かめ「ほんとにぼくはいつも、みんなのせわになるばかりだね。  
いすにこしをおろす。」



ねずみ「なんのなんの。さあこれが  
かめさんの大すきなぶどう  
酒よ。(からすが受け取って運ぶ)」

からす「ほう、うまさうなぶどう酒  
だな。」

ねずみ「次はやわらかい木の芽の塩  
づけ、かもしかさんの大こ  
う物。」

からす(おさらを受け取って)「はい、か  
もしかおばさんの大こう物。  
ねずみ「次はわたしの大すきなにん  
じんとごぼうのにつけ。」

(からすが運ぶ)

さあ、これでおしまい。(と、台所をはなれて、エプロンで手をふきながら) かもしかおばさんはおそいね。お昼前にはきつと帰ると言っていたのに。

かめ「どうしたのだろう。ぼくもさつきから心配していたんだが。」

からす「このごろはこの森にも、りょうしがやって来るから、まったく油断ができないよ。」

かめ「かもしかおばさんは、足は速いけれど、あわてものだから心配だなあ。」

からす「心配だねえ。やぎのおじさんのところへ行つたんだから、いくらゆっくりしていても、もう帰らなくてはならないはずだ。」

ねずみ(耳に手をあてて)「あ、なんだろう。」

みんなも耳をすます。何も聞えない。

ねずみ「なんだか、おばさんの声が聞えたような気がしたけれど、気のせいかしら。」

かめ「ぼくが速く走れたら、すぐにでもかけて行って、ようすを見て来るんだがなあ。」

からす「あ、そうだ。かめさんの言うとおりで。ぼくがすぐ飛んで行って、空からようすを見てこよう。(ぼうしをかぶって出て行くしたくをする)

ねずみ「おなかがすいているだろうけれど、それではからすさん、たのみますよ。」



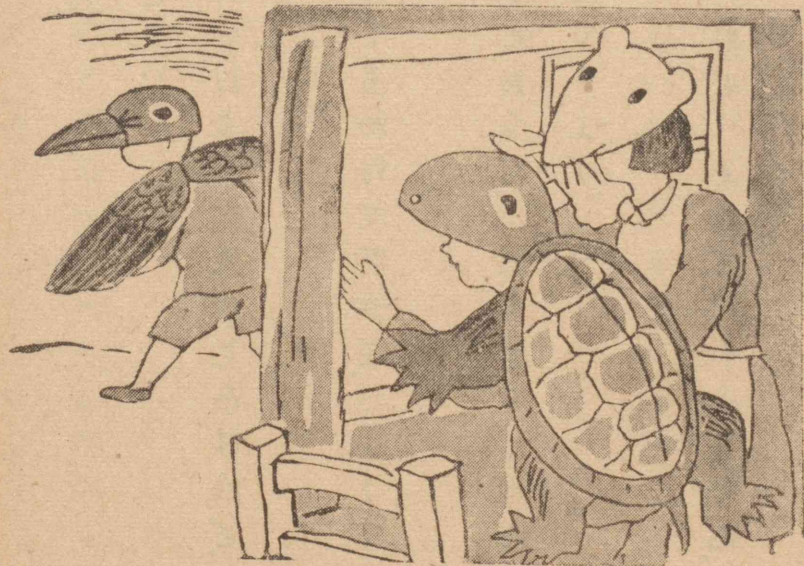
かめ「からすさん、お願いしますよ。」

からす「さあ、急いで飛んで行こう。」

おばさん「あぶないことでもあったらたいへんだ。」

ねずみ「では、気を付けて見て来てね。」

からす、下手の方に飛んで行く。ねずみとかめは、まどから手をふってそれを見送る。



かめ「からすさん、たのんだよ。」

ねずみ「あら、もう見えなくなつた。やっぱりからすさんは速い」

わねえ。」

かめ（つばさのように手をふって）「ずうつと空を飛べるんだもの、いいねえ。ぼくもからすさんみたいにつばさがあったらなあ。」

ねずみ「かめさんのこうらだつて、役に立つ時があるわ。」

かめ「でも、ぼくはこうらがあるために、いつもものろのろしていて、みんなのせわにばかりなつてゐるんだ。——かもしかのおばさん、どうしてゐるかなあ。心配だなあ。」

ねずみ「ほんとにどうしてゐるんでしょうね。このごろ、りょうしがわなをかけてゐるつて、ほんとうかしら。」

かめ「心配だなあ。やさしいかもしかのおばさんが、わなにか  
かったりしたらどうしよう。」

ねずみ「まどにかけよって」「あつからずさんが帰って来た。」  
かめ「同じくまどにかけよってさげぶ」「からずさあん。」

ねずみ「下手にかけこむ。かめは急ごうとするが、の  
ろのろしていて間に合わない。ねずみとからすが、「た  
いへん、たいへん。」と言いながらあわてて出て来る。

ねずみ「ほんとにどうしましょう。」

かめ「どうしたの。」

からず「息をはずませて」「わなにかかつて、苦しんでいるんだ。」

かめ「えつ、かもしかのおばさんがわなにかかつたつて。」

からず「そうだ、ぐずぐずしていて、りょうしが来たらいへん

だ。」

かめ「さつそく助けに行かなくつては。」

ねずみ「どんなじょうぶなつなだつて、わたしががりがりかじつ  
てしまえばだいじょうぶ。」

からず「ぼくは空から見張りをしている。」

ねずみ「さあ、行きましょう。」

からず「行こう、行こう。」

ねずみ「かめを見て」「かめさんはたいへんだから、うちでるす番し  
ていてください。」

かめ「えつ、るす番だつて。」

からず「では、かめさん、たのんだよ。きつとかもしかのおばさ  
んを助けて来るから……。」

からすとねずみがすばやく下手にかけて行く。かめは  
とり残されて、まどから手をふっている。そのままし  
ばらくまどから外を見ているが、テーブルのところ  
もどり、いすにこしをおろす。だが、すぐまた立ち上  
がってまどのところに行く。

かめ「やさしい、なかよしのかもしかおばさんが、わなにかか  
って苦しんでいるのに、ぼくだけこうしてぼんやりして  
はいられない。そうだ、歩みののろいぼくだって、何か  
の役に立つかもしれない。さっそく出かけよう。」

かめはからだをふりながら大急ぎで下手にはいる。上  
手からイソップのおじさんが、「ああ、かめさん、かめ  
さん。」とよびながら出て来る。急いでいるかめは、そ

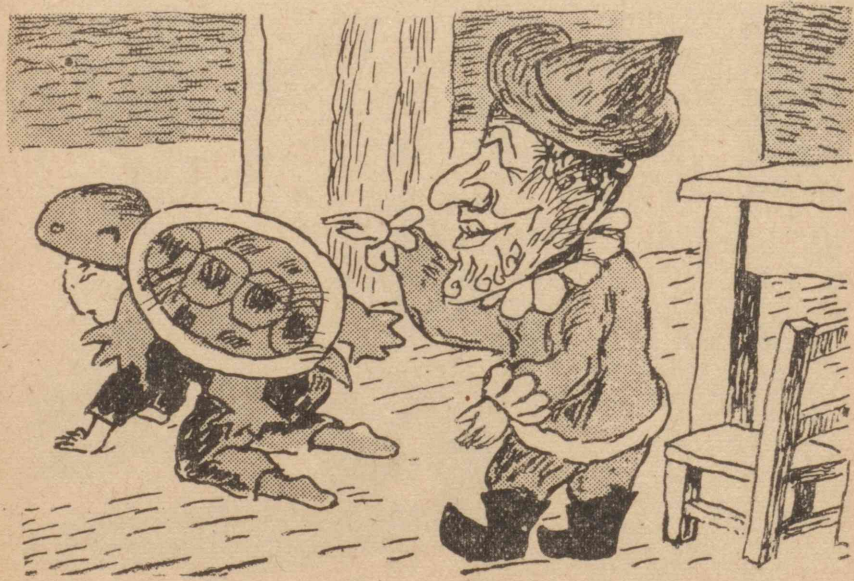
んなことに気が付か  
ないで、どンドン行  
ってしまふ。

——まくがしまる。

(二)

イソップのおじさん  
が、下手から急いで  
まくの前に出て来る。

イソップ「ああ、暑い暑い。かめさん  
より先回りしてやろうと思  
って、急いで来たので、す



つかりあせをかいてしまった。(あせをふく)  
その時、まくのうらから「ばんざい、ばんざい。」とさけ  
ぶ声が聞える。

からす(まくのうらで)「おばさん、よかったねえ。」  
ねずみ(まくのうらで)「よかったわねえ。」

イソツブ(耳に手をあてて聞きながら)「あ、ここが落としあなのある場所だ  
な。かもしかおばさんは助かったらしいぞ。うん、よか  
った、よかった。」

からす(まくのうらで)「あつ、りょうしだ。」

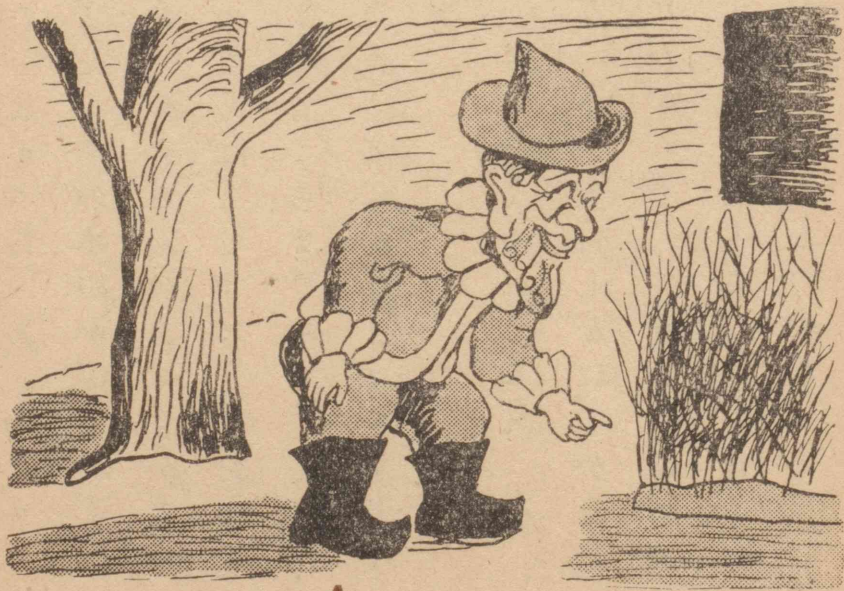
ねずみ(まくのうらで)「たいへんだ。」

イソツブ「なに、りょうしが来たつて。それはたいへんだ。(ぶたいの  
上手に向かつて) 早くまくをあけてくれたまえ。」

## 二の場面

まくがあくと、うす  
暗い森の中。まん中  
に小さい草むらがあ  
り、下手に大きな木  
が一本立っている。  
だれもない。イソ  
ツブは草むらの方へ  
進んで行く。

イソツブ(草むらをのぞいて)「うん、ここ  
がわなか。動物たちは急い



でかくれたらしい。よかった、よかった。あ、向こうから来るのがりょうしだな。よし、あの木のかけにかくれて見ていてやろう。おやおや、かめさんがあちらからやって来た。友だち思いのかめさんは、じっとしておれなくて、とうとうこんなあぶないところまで来てしまった。これはこまったことになったぞ。とにかくようすを見ていてやろう。(木のかけにかくれる)

上手からりょうしが出て来て、草むらをのぞいて見る。

りょうし「おや、いないぞ、ふしぎだな。さっきたしかに、かもしかがわなにかかったはずなんだが。や、つなをかみ切つてにげたんだな。これはおしいことをした。まだ遠くにはにげないだろう。どこにかくれているのかな。」

あたりをさがし回る。

上の方で「カアカア」と、からすが鳴く。

りょうし(それを見上げて)「いまいますいからすだ。」

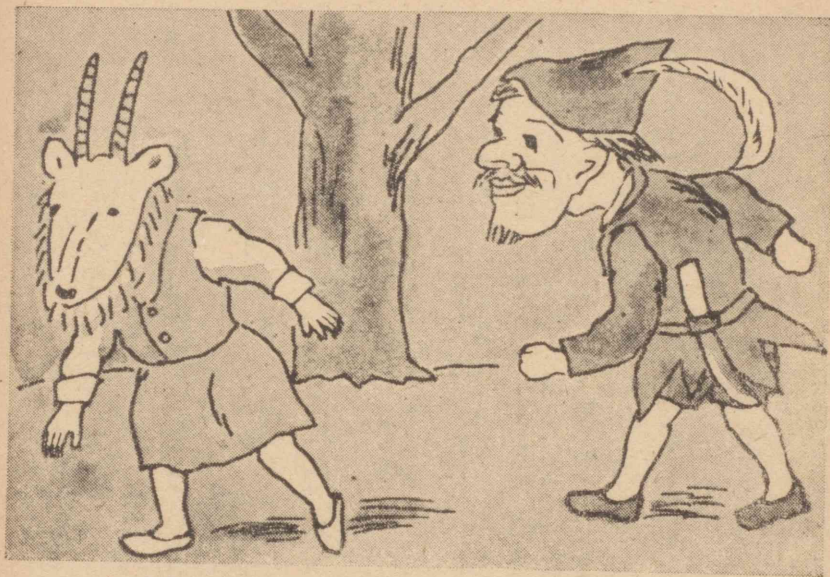
下手からかめが、何も知らずによちよちと出て来る。

おやおや、これは大きなかめだ。かもしかの代わりにこれを生け取ってやろう。」

りょうしはかたにかついだ大きなふくろをおろして、にげようとするかめをふくろの中に入れて、口をしっかりひもで結んでしまう。

りょうし「ようし、これでよし。さっそく帰って、こんばんのごちそうを作ってやろう。さて、どっこいしょつと。」

りょうしは立ち上がるようにする。上の方でからすが、



「ガアガア」と鳴く。

りょうし（それを見上げて）「まったくうる  
さいからすだ。」

その時、上手から、  
かもしかが、びっこ  
を引きながら出て来  
る。

りょうし「や、かもしかだ。びっこを  
引いているな。よし、つか  
まえてやろう。こら待て。」

（せおったふくろを投げ出して、かも  
しかを追いかける）

かもしかはびっここのまねをしながら、ぶたいを一二回  
にげ回り、とちゅうからびっここのまねをやめて、すば  
やくにげて行く。りょうしはそれを追って、下手には  
いる。上手から、からすが出て来て、大きな声でわら  
う。

からす（上手に向かってよぶ）「ねずみのおばさん、さあ出ていらっし  
やい。」

ねずみ（こわごわ上手から出て来て）「あんなことして、かもしかのおば  
さんだいいじょうぶなの。りょうしにつかまえられないか  
しら。」

からす（わらって）「なあに、だいいじょうぶさ。おばさんはね、びっ  
このまねをして、りょうしをだましたんだよ。足の速い

かもしかおばさんが、あんなりょうしにつかまるもんか。それよりも今のうちに、ふくろの中のかめさんを助けてやろう。

ねずみ「こんなふくろなんて、わたしがかじればすぐ破れますよ。ガリガリ……。なんだってかめさんまで出かけて来たのうちでるす番していれればいいのに。ガリガリ……。さあ、破けたよ。」

ふくろの中からかめが出て来る。

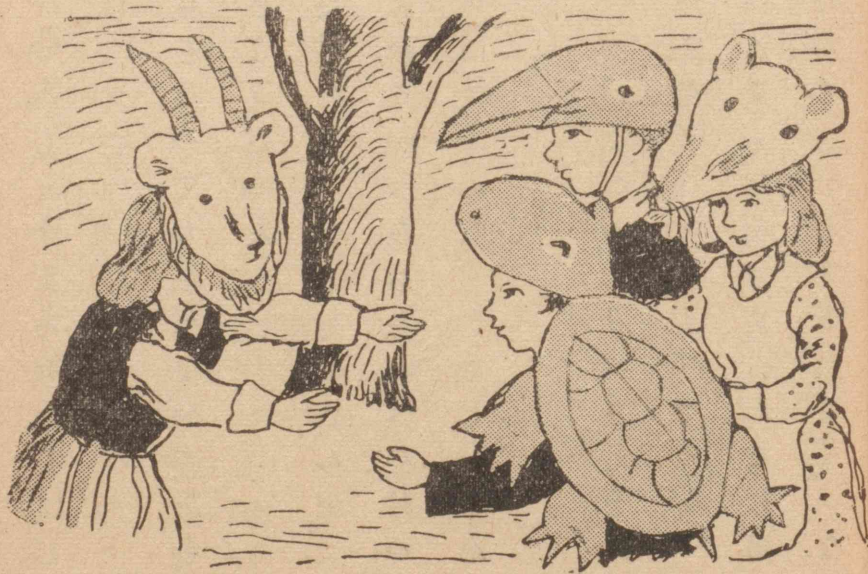
かめ「ねずみさん、ありがとうございます。からすさん、ありがとうございます。ほくどうしてもみんなのことが気になって、るす番なんかしていられなかったんだよ。ごめんね。(なき出しそうになる)からす「なに、いいんだよ、いいんだよ。かめさんがどんなにほ

くらのことを思ってくれたか、ちやあんとわかってい  
るよ。」

ねずみ「あら、かもしかさんが帰っ  
て来る。ほんとうによかつ  
たわね。」

からす「よかつたなあ。」  
かめ「ぼくもうれしくって。」

下手からかもしかが  
出て来る。みんなは  
かわるがわるだき合  
って喜ぶ。



かもしか「みんなが助けに来てくれなかったら、今ごろわたしはど  
うなっていたかわからない。」

かめ「ぼくも、ねずみさんにふくろを破ってもらわなかったら、  
りょうしのごちそうになるところだった。」

ねずみ「ふくろを破ったのはわたしだけれど、かもしかさんが、  
うまくりょうしをだましてくれなかったらたいへんだっ  
たわ。かめさんが助かったのは、みんな、かもしかさん  
のおかげです。」

かもしか「いやいや、からすさんが高い木の上から、りょうしを見  
ていて、わたしに教えてくれたのです。からすさんがい  
なかったら、それこそたいへんあぶなかった。わなに落  
ちたわたしを見つけてくれたのも、からすさんです。な

んとお礼を言ってよいやら……。」

からす「いやいや、ようすを見に行くことは、かめさんが言い出  
したのだから……。」

かめ「いやいや、そんな……。」

からす「やつぱりかめさんのおかげだよ。」

かめ「こまつた。そうではないんだ。」(頭をかかえる)

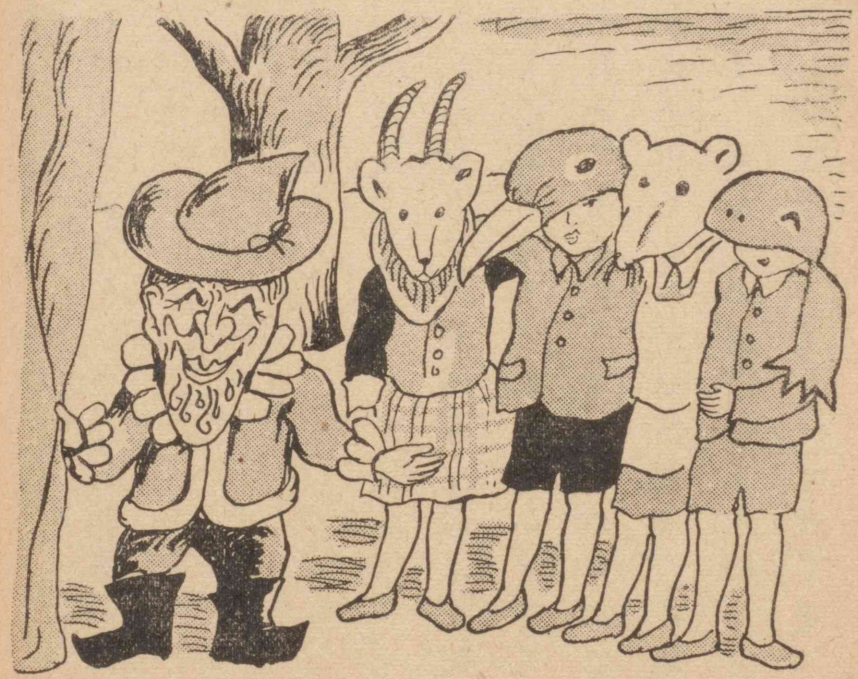
イソツブ(木のかげから出て来て)

「さて、みなさんの言い分はみんな聞

きました。かもしかさんもかめさんも、あぶないところ  
を助かったのは、だれのためでもない。みんなのためで  
す。みんながおたがいに力を出し合って助け合ったため  
なのです。わたしはここで、みんなの助け合うすがたを、  
今までじつと見ていました。(見物席に向かつて) どうです、



見物席のみなさん。  
かもしかさんや、か  
めさんや、からすさ  
んや、ねずみさんの  
世界だって、こうし  
て助け合えば、こん  
なに楽しくらせるの  
です。人間だって—  
いや、人間だから  
こそ、力を合わせて  
助け合えば、みにく  
い争いや、悲しみや、



苦しみを、この世界からすつかりなくすことができ  
ます。みなさん、このげきを見たついでに、むかしむか  
しのイソップ物語を、もう一度心をこめて読んでみて  
ください。

ねずみ「世界じゆうの人々が深いちえをもつて、  
イソップ「深いちえをもつて、  
かもしか「みんななかよく、  
からす「楽しく、  
かめ「幸福に、  
みんな「みんな幸福に、くらせるように。」

—まくがしまる。

弱	敗	欠	民	賃	器	告	綿	浴	史	県
(113)	(102)	(92)	(88)	(83)	(70)	(58)	(47)	(40)	(28)	(8)
謝	識	緑	官	政	詞	賞	委	要	寄	句
(114)	(102)	(93)	(88)	(84)	(73)	(59)	(47)	(40)	(29)	(11)
酒	得	益	制	府	容	特	席	非	統	際
(115)	(102)	(94)	(88)	(84)	(77)	(60)	(48)	(41)	(30)	(13)
鏡	因	護	現	財	副	総	式	常	領	例
(115)	(102)	(94)	(89)	(84)	(79)	(60)	(49)	(41)	(30)	(14)
臣	満	害	在	命	属	救	責	規	像	愛
(116)	(102)	(94)	(89)	(85)	(79)	(60)	(50)	(44)	(30)	(15)
約	化	景	居	専	州	法	技	則	申	情
(117)	(105)	(96)	(89)	(86)	(81)	(60)	(50)	(44)	(34)	(15)
塩	軽	庄	移	貯	件	幹	由	的	態	示
(123)	(108)	(101)	(91)	(87)	(82)	(68)	(50)	(44)	(35)	(15)
幸	永	希	昭	預	費	基	身	無	父	連
(143)	(109)	(101)	(92)	(87)	(82)	(68)	(50)	(45)	(37)	(18)
管	功	測	留	復	産	報	康	血	歴	
(111)	(102)	(92)	(88)	(83)	(70)	(58)	(45)	(37)	(28)	

勉強の手引

一 小鳥

(一) 小鳥の歌声

- (1) この文章の中に出てくる小鳥の名前をちやうめんに書いてみましょう。
- (2) 小鳥の鳴き声が土地によってちがうのは、どういふ訳でしうか。
- (3) あなたもいろいろの小鳥の鳴き声を聞いて、それを書きとめておきましょう。そしてあとでみんなに発表しましょう。
- (4) いろいろの動物の鳴き声を集めてみましょう。

(二) 小鳥のちえ

- (1) 小鳥たちの中で、一番かしこいのはなんたしうか。その訳をかんたんに書いてみま

しう。

(2) ヨーロッパでは、オズメほどのように人になつていきますか。みんなて話し合つてみましょう。

- (3) あなたも小鳥を観察したことがありますか。小鳥を観察した作文を書いてみましょう。

(三) つばめ

- (1) この詩をよく読んで覚えましょう。
- (2) 「そのあとではればれた。」とありますが、作者はどうしてはればれた気持ちになつたのでしうか。みんなて話し合つてみましょう。
- (3) 「くるくる」「どきどき」のように、二度くり返すことばはほかにもまたたくさんあ

るでしょう。どんなれいがありますか。みんなできてきただけたくさんあげてみましょう。

## 二 心の美しさ

### (一) 馬車と走る子

(1) この文章を読んで、心の美しい人は、だれだれと思いますか。ちょうめんに書いてみましょう。

(2) にいさんは、どうして馬車に乗らないで走って行ったのでしょうか。

(3) この兄弟は、どこへ行こうとするのでしょうか。

また、そこにはだれがいますか。

(4) 次の文はどういうところがちがうか、ちょうめんに書いてみましょう。

○乗合馬車が出発しました。

### ○あとのまつり

(5) 「まる木小屋のリンカーン」と「馬車と走る子」を読んで、心の美しさについて話し合みましょう。

## 三 よいからだに育てよう

### (一) 日曜日の朝

(1) 朝早く散歩すると、どうして気持がよいのでしょうか。この文章を読んでまとめてみましょう。

(2) 食事をする時にはどんなことに注意したらよいでしょうか。本に書いてないこともたくさんあると思います。みんなて話し合ってみましょう。

(3) 遊んだり運動したりする時、私たちはどんな点に気をつけなければならないのでしょうか。

### (二)

○乗合馬車が出発しようとしていました。

まる木小屋のリンカーン

(1) リンカーンは、ワシントンの伝記をだれから借りましたか。

(2) 借りた本をぬらしてしまったリンカーンは、そのつぐないに何をしましたか。

(3) この文章を読んで、リンカーンはどういう人と思いましたか。みんなて話し合ってみましょう。

(4) 次のことばを使って、短い文を書いてみましょう。

○むさぼるように

○とほうにくれた

○すなおに

○びしょぬれ

○読みふけて

(4) 何事をするにもからだのじょうぶなことが第一ですね。みなさんはからだをじょうぶにするためにどんなことをしたらよいと思いますか。いろいろ考えて、ちょうめんにまとめてみましょう。

(5) 次のことばを使って短い文を書いてみましょう。

○なるべく

○……したからといって

### (二) 水泳大会

(1) この文章をいくつかのだんらしくくぎってみましょう。そうして、そのだんらしくどんなことが書いてあるか、かたんにまとめてみましょう。

(2) 次の文はどんな気持を書いたものか、みんなて話し合ってみましょう。

- 早くその番が来ればよいと思ったり、いつまでも来ない方がよいと思ったりした。
- (3) この文章のどんなところがおもしろかったか、みんなて話し合ってみましょう。
- (4) 次のことばの訳を考えてちょうめんに書きましょう。そうして、あとでみんなて研究し合ひましょう。

○自治委員

○責任

○自由形

○地区別

○人工こきゅう法

- (5) あなたも学校であつたおもしろい行事を作文に書いてみましょう。

四 ことばのいろいろ

(一) 物の名前

- (1) 物の名前には、その物の形を元にして付けられたものがありますね。そのほかどんなところを元にして名前が付けられていますか。この文章を読んでちょうめんに書いてみましょう。

- (2) 次の文章の中から、名詞と思われるものを書きぬいてみましょう。

新町の一番打者で足の速い西川君が、慣れたかつこうでボックスにかまえている。

- (3) 「めじろ」「おじぎそう」「水すまし」「すずむし」などはどんなところを元にして付けられた名前でしょうか。みんなて考えてみましょう。

- (4) この文章を読んでどんなことを感じましたか。ちょうめんに感そりを書いてみましょう。

(二) こまかく言い表わす

- (1) おさない子供は、どうして犬がこちらへ来ても、向こうへ行っても、「ワンワン」としか言わないのでしょうか。

- (2) 動詞には、本にあげてあるもののほかに、どんなものがありますか。

- (3) 形容詞や副詞には、本にあげてあるもののほかに、またどんなものがありますか。

- (4) こまかく言い表わすためには、いろいろなことばを使わなければなりませんね。次の文章をもっとくわしく言い表わしてごらんなさい。

○さくらがさく。

○汽車が走る。

五 私たちをつなぐもの

(一) ゆう便の始まり

- (1) 今のようなゆう便の仕組みがなかったむかしは、どのようにして通信しましたか。ちょうめんに書いてみましょう。

- (2) 日本全国にゆう便制度をしたのは、だれですか。そして、それはいつしかれましたか。

- (3) 「このようなゆう便の仕組みはなんと便利なものでしょう。」と書いてありますが、このようなとは何をいつているのですか。ちょうめんに書いてみましょう。

- (4) 前島密はいろいろな仕事をしていきますね。年代順に表にまとめてみましょう。

(二) 子供通信

- (1) 礼文島、木曾、阿蘇山はどこにあるか、日本地図を見て調べてみましょう。

- (2) 礼文島はいつから有名になったのでしょうか。

か。また、なぜ有名になりましたか。

- (3) 木曾の通信を読んで、木曾はどこなところだと思えますか。みんなて話し合ってみましょう。

- (4) 阿蘇山の通信を読んで、あなたは阿蘇山のどこが一番よいと思えましたか。そこをちようめんに書きぬいてみましょう。

- (5) あなたも、あなたの住んでいる土地のことを書いて友だちに通信しましょう。

- (6) 次のことばを使って短い文を作りましょう。

○どこからともなく

○冬にそなえて

○はるか向こうに

- (7) 書き方のけいこをしましょう。

○通信

○選ぶ

○鉄道

○貯水池

○発電

## 六 人の力

### (一) 自然を利用する

- (1) 動物と自然とは、どんなに深い関係がありますか。いろいろなれいを調べてみましょう。

- (2) 科学という学問は、どんな学問でしようか。みんなて話し合ってみましょう。

- (3) 「自然というものは、私たちに都合のよいこともあれば、また悪いこともあります。」と書いてあります。どんなことが都合のよいことで、どんなことが悪いことなのでしょう。か。

### (二) 電燈の話

- (1) 次のことを調べて、ちようめんに書いてみましょう。

○日本に、初めて電燈のついたのは、今からいく年ぐらい前のことでしょうか。

○日本で、初めて電気を起す機械を作ったのは、今からいく年ぐらい前のことでしょうか。

○エジソンが、カーボン線を作ったのは、今からいく年ぐらい前のことでしょうか。

- (2) 発電所のように人や送電線のことを、かんたんな文章にまとめてみましょう。

### (三) かびの働き

- (1) この文章を読んで、どういうことを考えたか、話し合ってみましょう。

- (2) 書き方のけいこをしましょう。

○芽を出す。

○はいえんにかかる。

○科学者。

○有益なことを発見した。

- (3) 人間が自然を利用して生活に役立てていることを、いろいろ調べて話し合ってみましょう。

## 七 助け合い

- (1) このげきの中で、どんなところが一番おもしろいと思えましたか。ちようめんに書いてみましょう。

- (2) わなにかかったかもしかのおばさんを、ねずみさんやからずさんは、どんなふうにして助けたと思えますか。みんなて話し合ってみましょう。

- (3) 歩みののろいかめさんが、どうして落しあなのある場所まで来たのでしょうか。考え

- てみましょう。
- (4) このげきに「助け合い」という題がついて  
いるのは、どんな訳でしょうか。みんなて  
考えてみましょう。
- (5) みんなで相談して、配役を決め、「助け合  
い」のげきをしてみましょう。

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田国男  
 美術院会員 岩井良雄  
 編集委員 東京教育大学教授 岩淵悦太郎  
 国立国語研究所員 大藤時彦  
 民俗学研究所理事 上飯坂好実  
 東京杉並第四小学校校長 鳥山榛名  
 山梨大学教授 橋本芳一郎  
 東京学芸大学助教授 望月久貴  
 東京学芸大学助教授 佐藤英男  
 東京書籍株式会社編集部 大沢昌助

さしえ  
 装てい

新しい国語 五年上

(小) 第五学年前期用校 小国五一五

昭和二十六年五月一日 印刷  
 昭和二十六年六月一日 発行  
 (昭和二十四年十月十日 文部省検定済)  
 定価 円

Approved by Ministry  
 of Education  
 (Date )

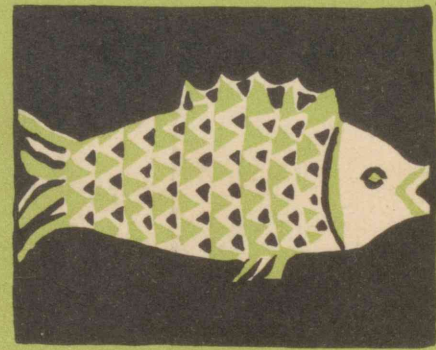
著作者 東京書籍株式会社編集部  
 代表者 藤田貞次

発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
 東京書籍株式会社  
 代表者 山田三郎太

印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
 東京書籍株式会社  
 代表者 山田三郎太

発行所 東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装てい登録中)



広島大学図書

0130449757



書籍株式会社

文庫

950

9757